

金沢大学

FD 活動報告書



令和元年度

<目次>

1	令和元年度 全学 FD 活動概要	1
1-1	本学 FD 活動の概要	2
1-2	各部局等からの回答をもとにした点検	4
1-3	FD 委員会の活動	8
1-4	<ピックアップ>特色ある FD 活動	13
1-5	国際基幹教育院 高等教育開発・支援部門の活動	25
2	各部局等の FD 活動	29
2-1	照会事項 1 平成 30 年度に提案された予定・課題の達成度	30
2-2	照会事項 2 シラバス記載要領の対応状況	39
2-3	照会事項 3 授業方法改善のための取組み等の実施状況	43
2-4	照会事項 4 成績評価基準等の作成・検証状況	53
2-5	照会事項 5 FD 研修会の実施状況	57
2-6	照会事項 6 その他の活動状況	65
2-7	照会事項 7 自己評価及び総評	69
3	各部局等の BSD 活動	75
3-1	照会事項 1 BSD 研修会の実施状況	76
3-2	照会事項 2 その他の活動状況	82
3-3	照会事項 3 自己評価及び総評並びに来年度の改善取組予定	84
4	資料編	87
4-1	金沢大学 FD 委員会規程	88
4-2	金沢大学における FD 活動指針	90
4-3	金沢大学履修規程	92
4-4	金沢大学シラバス様式	96
4-5	令和元年度金沢大学 FD 委員会名簿	97

1 令和元年度 全学 FD 活動概要

1-1 本学 FD 活動の概要

本学では平成 20 年度、「金沢大学 FD 委員会規程」（後掲：4 資料編）に基づき、教育企画会議に全学の FD 委員会を設置した。

FD（ファカルティ・ディベロップメント）とは、

授業の内容・方法の改善等による教育の質の向上並びに学生の心身の保護とキャリア形成を促進する等の学生支援を図るための教員及び部局等の研究、研修等の自発的取り組みをいう。（同指針第 2）

FD 委員会は、平成 20 年度に「金沢大学における FD 活動指針」（後掲：4 資料編）をまとめた。同指針は FD 活動が継続的かつ実質的に改善するために、FD 活動をいわゆる PDCA サイクルの中に位置づけている（図 1）。その一環として FD 委員会は各部局等が毎年度作成する報告書に基づき、当該年度の全学における FD 活動に関する報告書（「年度報告書」）を作成することとした。この規定に基づいて作成したものが本報告書である。

本報告書では、各部局等が令和元年度の活動に対して行った自己評価のみならず、令和 2 年度における改善に向けての取り組み予定についてもまとめている。これらの点について他部局等の状況を相互に確認し、FD 活動を相互に促進しあうことで、本学全体の FD 活動が継続的かつ実質的に改善することが期待できる。



図 1 金沢大学における FD 活動

なお、同指針の特徴の1つとして、授業の内容や方法の改善に関することにとどまらず、学生の心身の保護とキャリア形成を促進する等、学生支援に関する活動をも FD 活動の中に含めている点が挙げられる。この点に関連して、本学では教育企画会議学生生活委員会を中心に「学生支援・学習支援」に資する目的で『教職員必携 学生サポートガイドブック』を毎年度、見直しを行い、アカンサスポータルに掲載するとともに、関係教職員にエッセンシャル版パンフレットを配布している（図 2）。その内容は学生相談、留学生支援、就職支援、障がい学生支援等、多岐にわたっており、教職員は本冊子を有効に活用することにより、学生が抱えた問題を早期に解決し、すべての学生が「充実した学生生活」が送れるように、学生支援に努めている。

また、教員の FD 活動支援や学生支援の分野で、職員の果たすべき役割はより一層大きくなりつつある。こうした現状に鑑み、職員の SD（スタッフ・ディベロップメント）及び BSD（バックアップ・スタッフ・ディベロップメント）活動についての指針を盛り込んでいることも同指針の特徴の1つである。

ところで、同指針では、国際基幹教育院 高等教育開発・支援部門が FD 及び BSD 活動に対して必要な支援を行うことを定めている（第 8）。国際基幹教育院 高等教育開発・支援部門が令和元年度に行った FD・BSD 活動及び他部局等の FD・BSD 活動に対して行った支援の内容については 1-5 国際基幹教育院 高等教育開発・支援部門の活動においてのべる。



図 2 教職員必携学生サポートガイドブック

1－2 各部局等からの回答をもとにした点検

【照会事項1「平成30年度に提案された予定・課題の達成度」に対する回答】

平成30年度に提示した課題について、改善を達成したと思われる部局は以下の通りである。

- ・経済学類：卒業者アンケートで、コミュニケーション能力の向上を確認した。
- ・国際学類：クォーター制度の実質化と情報教育に関してFDを実施した。
- ・物質化学類，物質化学専攻：専門科目にALAを導入した。
- ・薬学類・創薬科学類，創薬科学専攻，薬学専攻：学習成果達成度評価でB以上の結果を生み出した。
- ・新学術創成研究科：全シラバスをチェックした。
- ・医薬保健学総合研究科（修士課程・医学博士課程）：学生アンケートで、高い自己達成度を得た。
- ・教職実践研究科：事前研修や附属学校との連携を実現した。

ほとんどの部局において、取り組みを開始したという記述が多く、明確に成果を実現したと判断できるものは少ない。課題については、単年度で達成することが難しいものもあり、長期的な取り組みが必要である。

【照会事項2「シラバス 記載要領の対応状況」・照会事項3「授業方法改善のための取り組み等の実施状況」・照会事項4「成績評価基準等の作成・検証状況」・照会事項7「自己評価及び総評」に対する回答】

シラバスにおけるアクティブ・ラーニングと英文表記の点検、授業評価アンケート、卒業者に対するアンケートの実施とフィードバック、教員相互の授業参観・授業評価、成績評価基準の作成状況、成績評価基準又は成績評価方法の検証及びFD活動の自己評価について、各部局からの回答をまとめたものが表1である。

表1から分かることは、シラバスの点検、授業評価アンケート、卒業者に対するアンケート及び成績評価基準の作成は浸透しているものの、授業参観と成績評価基準又は成績評価方法の検証については、改善の余地があるということである。いずれの項目についても、実施状況は、少数科目について実施した部局から全科目について実施した部局まで差があり、実施範囲を広げることが、今後の課題である。

各項目については、以下のことが指摘できる。

○シラバスの点検

①アクティブ・ラーニングや②英文表記を一部の科目についてチェックしている部局が多い。また、チェックの多くが教員各自に任せられている。体系的・整合性のあるカリキュラムを構築するためにも、プログラム担当者間で、シラバスの内容について検討を行うことが必要である。

○授業評価アンケート

授業時間内に実施することによって、回答率を上げることができることが知られている。また、依然として、その結果は、担当者個人で検討する部局が多い。

しかしながら、科目の特性やカリキュラム上での位置付けを考えるならば、組織的に検討した上で、教育改善に取り組むことが望ましい。また、学生の負担感を減らし、アンケートへの協力が意義のあるものと感じられるためには、結果のフィードバックが重要である。ウェブ・サイトにおいて、結果の概要を示す部局が増えているが、薬学類のように、自由記述に対する具体的な回答があれば、学生の関心も高まると考えられる。

表1 回答一覧

部局名	シラバス 点検 A L ※ 1	シラバス 点検 和 英 ※ 1	授 業 評 価 アンケ ※ 2	卒業生 アンケ ※ 2	授業参観 ・ 評 価 ※ 1	成績評 価基準 作 成 ※ 1	成績評 価方法 等検証 ※ 1	F D 自 己 評 価 ※ 3
人文学類	○	○	○	◎	◎	◎	◎	3
法学類	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	3
経済学類	◎	◎	◎	◎	○	◎	○	4
学校教育学類	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	4
地域創造学類	◎	◎	○	○	○	○	○	3
国際学類	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	3
数物科学類 数物科学専攻	○	○	◎	◎	○	○	◎	3
物質化学類 物質化学専攻	◎	◎	◎	◎	△	○	○	3
機械工学類 機械科学専攻	○	○	○	○	△	○	○	3
フロンティア工学類	◎	◎	○	—	△	◎	△	4
電子情報通信学類 (電子情報学類) 電子情報科学専攻	○	◎	△	△	△	◎	△	3
地球社会基盤学類 (環境デザイン学類) 環境デザイン学専攻	○	◎	△	△	○	○	△	3
生命理工学類 (自然システム学類) 自然システム学専攻	○	○	△	△	△	○	△	3
医学類	○	○	◎	◎	○	◎	○	4
薬学類・創薬科学類 創薬科学専攻、薬学専攻	◎	◎	◎	○	△	○	○	3
保健学類 保健学専攻 (博士前期・後期課程)	◎	◎	◎	△	◎	○	—	3
人間社会環境研究科	◎	◎	○	◎	△	◎	△	3
新学術創成研究科	○	○	○	○	◎	◎	○	3

1-2 各部局等からの回答をもとにした点検

部局名 \ 項目	シラバス 点検 A L ※ 1	シラバス 点検 和 英 ※ 1	授 業 評 価 ア ン ケ ※ 2	卒 業 者 ア ン ケ ※ 2	授 業 参 観 ・ 評 価 ※ 1	成 績 評 価 基 準 作 成 ※ 1	成 績 評 価 方 法 等 検 証 ※ 1	F D 自 己 評 価 ※ 3
医薬保健学総合研究科 (修士課程・医学博士課程)	○	○	◎	◎	○	◎	○	3
先進予防医学研究科 (医学博士課程)	○	○	◎	◎	◎	◎	○	3
法務研究科	◎	—	◎	◎	◎	◎	◎	4
教職実践研究科	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	4
国際基幹教育院 GS 教育部門	◎	◎	○	△	○	◎	◎	3
国際基幹教育院 外国語教育部門	◎	◎	◎	△	◎	◎	◎	4
国際基幹教育院 高等教育開発・支援部門	◎	◎	○	△	◎	◎	◎	4
メディア基盤センター	△	△	△	△	◎	△	△	3
国際機構	◎	◎	◎	—△	◎	◎	◎	3

※1. 実施状況 ◎：実施した，○：一部点検した，△：実施検討中，×：点検しなかった，

—：今年度対象外

※2. 活用状況 ◎：活用した，○：一部活用した，△：活用検討予定，×：活用しない，

—：今年度対象外

※3. 評価 4：大いに評価できる，3：概ね評価できる，2：あまり評価できない，

1：ほとんど評価できない

○卒業生に対するアンケート

多くの部局がその実施に苦労している。これは，進路調査についても同様であるが，全学的に，回答率を上げる方策を考える必要がある。

○授業参観・授業評価

依然として，モデル授業としている部局が多い。授業参観の趣旨は，授業の公開性を高めることによって，教育方法について，気軽な意見交換や教育実践の共有ができるようになるということである。また，授業評価アンケートの結果の妥当性についても，本来は，ピア・レビューがなければ，判断ができない。一部，生命理工学類のように，動画の視聴をあげている部局もあったが，オンライン教育の併用によって，そのような授業参観も，今後は可能である。

○成績評価基準の作成

成績評価の方法やガイドラインを示しているのみの部局が多く，各科目の成績評価基準の妥当性を検討する段階には至っていない。今後，ルーブリックの浸透が望まれるところである。この点において，最も厳密な成績評価を行なっているのは，複数の教員で成績チ

チェックを行なっている教職実践研究科である。

○成績評価基準又は成績評価方法の検証

アカンサス・ポータル上に成績分布が公表されている。したがって、担当者以外もチェックすることは可能であり、成績分布のあり方を担当者間で検討することが必要である。授業評価アンケートと同様、成績分布についても、各科目の特性やカリキュラム上での位置付けが関連し、成績分布の問題を担当者や履修学生のみには帰することは適切ではない。特に、不合格が多く、進級や免許の取得に支障がでるような科目については、学類の把握が必要である。

○FD 活動の自己評価

それぞれの項目について、判断基準が明確でないために、部局間の比較ができない。例えば、薬学類は、初任者研修や学生へのフィードバック等 FD において、先進的な事例であり、より高い評価が適切である。また、先進予防医学研究科における VOD 教材の英語化は、現在のオンライン授業に先行する試みとして、高く評価できる。

以上のことから、金沢大学における FD は枠組みが明確であり、各部局とも取り組むべき課題を認識している。引き続き、対象科目を増加させ、教育改善の内実を深めて行くことが課題である。そのためにも、FD がイベント的な開催から、恒常的な意見交換・情報共有・PDCA サイクル実現の場として、機能することが期待される。

特に、令和 2 年度は、新型コロナウイルスの流行を受けて、オンライン教育を短期間で準備するという事態となった。すでに、各部局においては、さまざまなサポートが行われているが、この過程で得られた知見を共有し、今後に備えることが必要である。

【FD の実施状況】

各学類においても、FD が実施されており、英語化・初年次教育・オンライン学習・WebClass・メンタルヘルス・チュートリアル・アクティブ・ラーニング・アドバイジング・就職などが取り上げられている。分野別 FD の事例としては、以下のものがあげられる。

- ・学校教育学類：実践講義型授業・インターンシップ
- ・医学類：CBT・OSCE・チュートリアル研修
- ・先進予防医学研究科（医学博士課程）：3 大学合同 FD
- ・新学術創成研究科：JAIST との合同 FD
- ・国際基幹教育院（外国語教育部門）：EAP 担当者研修・TOEIC 準備科目教材準備
- ・国際機構：CLIL・相互授業参観

FD は、一般・啓蒙型から分野別に移行することが望ましく、金沢大学においても、徐々にその移行はなされている。今後とも、学務部・高等教育開発・支援部門と各部局における FD は、効率的に棲み分けをすることが望ましい。FD の基本は、外部講師による単発的なイベントではなく、授業参観や教育データに基づく、学類における教育活動の点検・改善であり、恒常的な意見交換によって、改革が実現されることが望ましい。

1-3 FD委員会の活動

令和元年度における活動		
平成31年4月3日	(水)	2019年度全学FD研修会 ～新任教員を中心として～開催
令和元年7月31日	(水)	第1回FD委員会開催
令和元年9月3日 ～9月5日	(火) ～ (木)	英語による授業担当者のためのFD研修会開催
令和元年9月10日 ～9月12日	(火) ～ (木)	第1回全学FD研修会「2019年度授業設計ワークショップ」開催
令和元年9月30日	(水)	第2回FD委員会開催
令和元年11月20日 11月22日	(水) (金)	第2回全学FD研修会「FD報告書成果発表会」開催
令和元年12月11日	(木)	第3回FD委員会開催
令和元年12月25日	(水)	第3回全学FD研修会「著作権に関するセミナー」開催
令和2年2月28日	(金)	第4回FD委員会開催
令和2年3月27日	(水)	第4回全学FD研修会「教育実践報告会」開催

- 各委員会の協議・報告事項及び議事要旨については下記にて公開している。
本学トップページ→教職員→学内会議の議事要旨等→FD委員会
<https://www2.adm.kanazawa-u.ac.jp/kaigi/gakusei/02/index.htm> (学内限定)
- 各研修会（英語による授業担当者のためのFD研修会は除く。）の動画又は資料については本学ポータルサイト（アカンサスポータル）にて公開しているので、教職員は随時閲覧可能である。

【研修会】

「2019年度全学FD研修会～新任教員を中心として～」		
主 催	教育企画会議 FD委員会	
日 時	平成31年4月3日(水) 13時30分～16時10分	
会 場	総合教育2号館 D10講義室	
対 象	前年度研修会（平成30年4月4日開催）以降に本学に採用された教員を主とし、関心のある教員や学生系職員の参加も可能	
参 加 者	70名	
概 要	新任の教員を主な対象とする全学の研修会は、平成20年度から毎年度開催	

1-3 FD 委員会の活動

	している。従来は、「教養教育担当に関する初任者研修」（共通教育機構が実施、平成 16～18 年度）、「新任教員等研修会（兼共通教育担当に関する研修会（初任者対象））」（教育担当理事と共通教育機構長の連名で実施、平成 19 年度）として開催されてきた。 本研修会の目的は、本学の教育及び学生支援等の現状を把握することで、教育体制全般に対する理解を深めることである。
プログラム	(1) 本学における FD について (吉永 契一郎 国際基幹教育院高等教育開発・支援系長) (2) 入試状況及び学生募集活動について (尾島 恭子 学長補佐 (学生募集・入試改革担当)) (3) 就職状況と支援への取り組みについて (山本 均 就職支援室長) (4) 学生の心のケア及び学生相談について (足立 由美 保健管理センター准教授) (5) アカサスポータルについて (森 祥寛 総合メディア基盤センター助教) (6) 実践ミニ研修会～授業方法に関する研修～ (杉森 公一 国際基幹教育院高等教育開発・支援系准教授)
 	

「英語による授業担当者のための FD 研修会」			
主 催	授業科目英語化に関する WG, 国際基幹教育院スキルアップセンター		
後 援	教育企画会議 FD 委員会		
概 要	本研修会は、英語による授業科目の拡充の取組の一環として、英語で教えるために必要な英語表現、スキル、手法を学ぶことに特化した内容を実施する。		
日 時	令和元年 9 月 3 日 (火) 9 時 00 分～16 時 30 分	令和元年 9 月 4 日 (水) 9 時 00 分～16 時 30 分	令和元年 9 月 5 日 (木) 9 時 00 分～16 時 30 分
会 場	総合教育講義棟 A3 講義室	総合教育講義棟 A3 講義室	総合教育講義棟 A3 講義室
参 加 者	7 名	13 名	9 名
受講コース	講義とプレゼン テーション (導入)	発音と Global Englishes	アカデミックライティ ング (導入)



「第1回全学FD研修会 2019年度授業設計ワークショップ」

主 催	国際基幹教育院高等教育開発・支援部門，教育企画会議 FD 委員会，大学教育再生加速プログラム検討委員会，国際基幹教育院スキルアップセンター
後 援	大学コンソーシアム石川
日 時	令和元年9月10日（火）～12日（木）
会 場	総合教育1号館 A5 教室
参 加 者	延べ数16名（実人数7名）
概 要	本研修会は、「現在担当している授業をより良いものにしたい」という教員や、「今後、担当するかもしれない科目の組み立てについて考えてみたい」という将来教員になることをめざしている大学院学生を対象とする。 また、授業設計を行うために必要な教育の基礎的知識と技術を身につけるとともに、参加者間での話し合いを通して、学生の学習を促すためのより良い授業を設計すること及び異分野・多機関の教員が教育について語り合う場をつくることを目的として実施する。
プログラム	授業設計ワークショップ ゲスト：永良史氏（発創デザイン研究室代表・福井大学非常勤講師） ファシリテーター：杉森公一（国際基幹教育院高等教育開発・支援系） 河内真美（国際基幹教育院高等教育開発・支援系）



「第2回全学FD研修会 FD報告書成果発表会」

主 催	教育企画会議 FD 委員会, 大学教育再生加速プログラム検討委員会, 国際基幹教育院スキルアップセンター
後 援	国際基幹教育院高等教育開発・支援部門
日 時	令和元年 11 月 20 日 (水) 12 時 15 分～12 時 45 分 令和元年 11 月 22 日 (金) 15 時～16 時
会 場	総合教育講義棟 4 C7 教室, 総合教育 1 号館 2 階会議室
参 加 者	41 名
概 要	金沢大学では、毎年部局ごとの組織的なファカルティ・ディベロップメント (FD) 活動についてFD報告書にまとめ、公開することで、活動の共有と振り返りを図っている。平成 30 年度 FD 報告書には、学問分野の特性に応じた活発な取り組みを紹介しており、部局を越えて参考になる事例が多い。今回、第 1 回は国際基幹教育院 (外国語教育部門), 第 2 回は理工学域, 医薬保健学域 (医学類・医学教育研究センター) の報告を全学的に共有する。
プログラム	「FD 報告書成果発表会」 (ファシリテーター: 杉森 公一 国際基幹教育院高等教育開発・支援部門 准教授)



「第3回全学FD研修会 著作権に関するセミナー」

主 催	教育企画会議 FD 委員会
日 時	令和元年 12 月 25 日 (水) 13 時 00 分～14 時 00 分
会 場	総合教育講義棟 B4 講義室
参 加 者	45 名
概 要	平成 31 年 1 月に「著作権法の一部を改正する法律」が施行された。この改正には「教育の情報化に対応した権利制限規定等の整備 (第 35 条関係)」等大学教員委関係する内容も含まれている。 本研修会では、「一般社団法人学術著作権協会」事務局長の石島寿道氏に「授業で著作物を利用する」際に必要な知識を、改正著作権法の内容も含めて解説。
プログラム	テーマ「教育研究従事者が知っておくべき改正著作権法の知識」 (講師: 石島寿道 氏 一般社団法人学術著作権協会 事務局長)

「第 4 回全学 FD 研修会 教育実践報告会」

主 催	教育企画会議教務委員会，教育企画会議 FD 委員会，大学教育再生加速プログラム検討委員会，国際基幹教育院スキルアップセンター
後 援	国際基幹教育院高等教育開発・支援部門
日 時	令和 2 年 3 月 27 日（金） 13 時 30 分～15 時 30 分
会 場	総合メディア基盤センター 多目的室
参 加 者	18 名
概 要	各学類が所属の専門性に応じて実施している，アクティブラーニング型授業，授業の英語化，課題解決型授業（PBL），ALA/TA 活用授業といった教育実践や取組について，部局を越えて情報の共有を行い，議論する。
プログラム	<人間社会学域> ・国際学類での英語化授業・アクティブラーニング (中野 涼子 人間社会研究域法学系教授) <理工学域> ・数式処理システムによる自己調整型反転学習 (牛島 顕 理工研究域数物科学系准教授) ・2 学年合同の大規模 PBL の試行・TA 活用 (小林 俊一 理工研究域地球社会基盤学系准教授) <医薬保健学域> ・Web Class を利用した双方向型授業の実践 (倉知 慎 医薬保健研究域医学系教授) <全体討論>



1-4 <ピックアップ>特色あるFD活動

令和元年度における全学及び各部局等のFD活動は種々実施され、全学のFD研修会(1-3)及び各部局等のFD研修会(後掲:2-5)も多数実施された。

その中で、特色あるFD活動を各々1つピックアップし、照会する。

【学域等及び研究科単位】

学域(人間社会学域, 理工学域, 医薬保健学域), 研究科(人間社会環境研究科, 自然科学研究科, 医薬保健学総合研究科), 国際基幹教育院で実施している特色あるFD活動は次のとおり。

部局名	FD活動
人間社会学域	現在, FDに関する研修会については, 人間社会学域としてではなく各学類単位で実施しており, 人間社会学域としてのFD活動は, 残念ながら活発とは言えないというのが現状である。 そのため, 今まで各学類で実施してきた取り組みで, どの学類にも共通するようなテーマは学類の枠を超えて学域共通で実施することなどを令和2年度に人間社会系教育研究会議FD委員会で検討し, 実施することを考えている。
理工学域 自然科学研究科	- 毎年5月頃に理工系の新任教員(3年以内に採用された未受講者等)を対象に新任教員研修会を開催し, 全学FD研修会と異なるプログラムによる研修を実施している。 - 理工系の教育方法改善委員長, 教務委員長, 学生委員長, 技術支援センター職員, 学校教育系教員のほか, 各学類持ち回りで講師を担当し, 理工学域・自然科学研究科の特色に沿った講演を行っている。 - 毎年2～3月頃に「理工学域・自然科学研究科FDシンポジウム」を開催し, 講演やワークショップ, パネルディスカッションなどを実施している。参加者は主として理工系の教員であるが, 全学の教職員に案内している。 - テーマは毎年変わり, 「アクティブ・ラーニング」「学生のメンタルケア」「留学生への英語での指導」「グローバル人材育成・英語による専門教育」など, 近年問題となっている, あるいは要望が高くなっている課題を取り上げている。 - 令和2年3月に「これからの理工系グローバル人材養成及び英語による専門教育の在り方」をテーマに北陸信越工学教育協会石川県支部と共催予定であったが, 令和元年度内の開催は中止となった。

1-4 <ピックアップ>特色あるFD活動

部局名	FD 活動
医薬保健学域 医薬保健学総合研究科	国際基幹教育院との共催でアクティブ・ラーニングの研修会を宝町キャンパスにおいて、医学類及び保健学類教員を対象として定期的を実施している。令和元年度は9回FD研修会を実施したが、12月以降に実施した3回のFD研修会については、医学類、保健学類のみならず、石川県内の医療系大学である金沢医科大学、金城大学、県立看護大学、小松大学、北陸大学にも門戸を広げ、アクティブ・ラーニングの手法を学ぶ機会に加えて、学内外の教員間で積極的な意見交換等を実施するなど、手法や効果について理解を深めた。
人間社会環境研究科	本研究科に在籍する大学院学生の半数以上が留学生及び社会人学生である。各専攻でこれらの学生に対する指導について、問題意識を持っている教員は少なくない。学生指導に関する問題は、留学生の場合、異なる文化的背景と教育制度、不十分なコミュニケーションから生じ、社会人学生の場合、年齢、大学教育に対する期待のずれから生じている。特に留学生については、メンタルヘルスの問題も生じており、研究科としてどのように対処するか喫緊の課題となっている。この状況下、留学生のメンタルヘルスを扱ったFD研修会を行った。保健管理センター講師から、相談事例の特徴や問題化しやすいパターン、介入方法の紹介後、実際の指導に基づいた質疑応答を行った結果、留学生指導に共通の課題が明らかになった。このFD研修の結果を踏まえ、まずは留学生の受入れについて、教員の共通認識を持つことを目的に、受入れ前・受入れ後の留意すべきチェック項目一覧を研究科として作成し、令和2年度から実施することとした。
国際基幹教育院	国際基幹教育院全体としては、スキルアップセンターを中心に、年2回、実践報告を中心としたFDを行っている。前期は日本語で、後期は英語で開催している。

【学類単位】

今回は、人文学類、国際学類、地球社会基盤学類、保健学類及び国際基幹教育院で実施している特色あるFD活動を紹介する。

○人文学類

取組名称	FD研修会
開催日	令和2年1月15日（水）
参加人数 （概数）	38名
テーマ：「英語化授業の実践」 報告者： 足立拓朗「地域考古学A1」「地域考古学A2」 渋谷良方「英語学総論A」 菅原裕文「西洋美術史A」「西洋美術史B」 中島弘二「地誌学演習1」「地誌学演習2」 報告時間： 15分（質疑応答含む）×4名 総合討論： 10分 今年度の人文学類のFD研修会は、「英語化授業の実践」に関して行われた。授業の英語化については、完成年度の目標に向けて学類全体で徐々に進めつつあるが、教員個人のレベルでの試行錯誤にとどまっており、授業英語化のこれまでの成果や課題を学類全体で共有するまでには至っていなかった。そこで今回のFD研修会では、これまで授業の英語化を先駆的に実践してきた教員数名に実践報告をしてもらい、そこで明らかになった成果や問題点を学類全体で共有し、今後の授業の英語化の推進に役立ててもらうことを狙いとした。 報告では、パワーポイントやレジュメを用いながら、成功例のみならず失敗例も含めて実際の授業における英語化の取り組みが具体的に示され、授業の英語化の効果や問題点、反省点を参加者間で共有できたと思われる。	

○国際学類

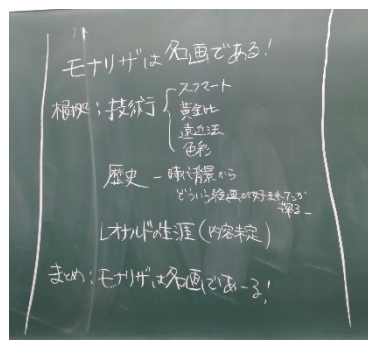
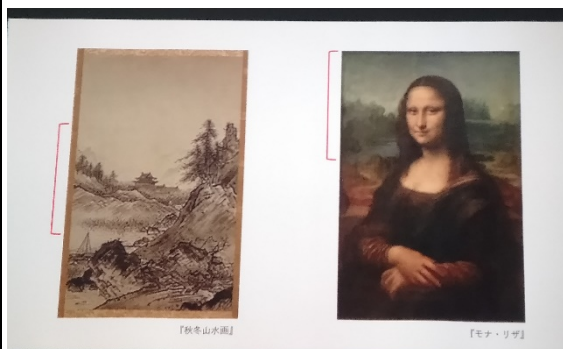
取組名称	「ヨーロッパ歴史特論A2」授業最終発表
開催日	令和2年1月20日（月）
参加人数 （概数）	約30名 学生+教員4名

「モナリザは名画か」というテーマで

①モナリザを熟視したのちの学生のフリートーキング→②過去の識者によるモナリザ評価の収集と考察→調べ学習の観点の析出（美をめぐる技法・思想・歴史）→③観点に基づく文献資料の読み込み→④レオナルド・ダ・ヴィンチの他の作品，同時代の他の作家の作品，西洋美術史上の他の時代の作品との比較，東洋美術との比較→⑤プレゼン内容の練り上げ→⑥結論：これらを踏まえたプレゼンテーションによる各グループの見解表明 「モナリザは名画か」 否か

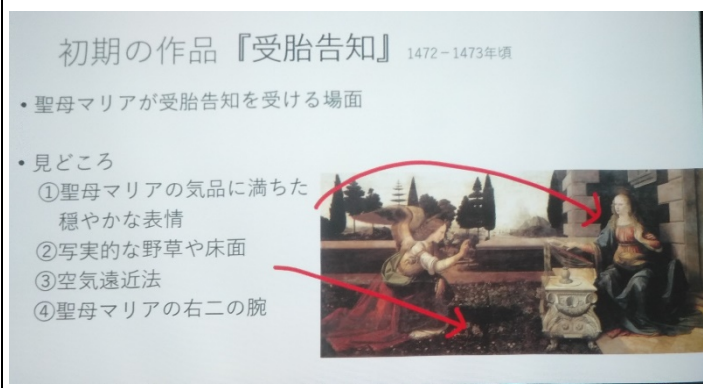
成果

どのグループも非常に完成度の高い最終プレゼンを完成させ，見学の他教員からの高い評価をいただき，論理的に（根拠を踏まえ論を立て答えを導く）見解を表明するという他の授業にも適用できる訓練が行えたと思う。



最終プレゼンのスライド①

練り上げ段階のブレインストーミング



最終プレゼンのスライド②

○地球社会基盤学類

取組名称	アクティブ・ラーニングとファシリテーションの取り込み
開催日	令和2年3月2日（火）
参加人数 （概数）	21名



地球社会基盤学系の土木防災コースと環境都市コースにより、「大学教育におけるアクティブ・ラーニングとファシリテーション」をテーマに、大学教育再生加速プログラム検討委員会との共催の形で2コース合同FD研修会を開催した。地球社会基盤学系2コース以外の教職員やTAの聴講も可能とした。

FD研修会において、杉森 公一 准教授、河内 真美 特任助教を講師として招き、「プロジェクト・ベース・ラーニング（PBL）の授業設計とティップス」、「教育ファシリテーションと、TA連携の方策」の話題提供をしていただき、参加者全員はPBLの授業設計を理解し、ファシリテーションの演習も行った。

その後、本学類のコーディネーター 小林俊一准教授が「2019年度社会基盤デザイン演習の実施報告」を行い、自由討論により意見交換をしました。

○保健学類

取組名称	教育力向上研修「アクティブ・ラーニングとその学習評価」
開催日	令和元年12月4日（水）
参加人数 （概数）	47名

保健学類では、コンプライアンス研修と教育力向上研修を開催した。教育力向上研修として「アクティブ・ラーニングとその学習評価」を、国際基幹教育院の杉森公一准教授を講師に迎えて行った。教育評価にフォーカスし、学習のための評価・真正の評価や、学生が達成できる透明性を備えた課題作成について理解を深めた。これが契機となって学生の自律的な学習を促す各教員の取り組みが期待される。

また、保健学類では高大接続プログラムWGメンバーを中心に、各専攻の担任が今まで高めてきたアクティブ・ラーニング手法を活用し、看護学、放射線技術科学、検査技術科学、理学療法学及び作業療法学の5専攻融合型講義を初学者ゼミⅡで行った。この授業を通して学生は、医療の場の課題解決に向けた協働の必要性を実感し、そのための

高い知識と技術習得のために、主体的学習態度を身に着ける重要性を実感していた。



最後に、今年度も学生が選ぶ「優秀教育教員」表彰制度を実施して4名の授賞者を決定した。この制度が学生の自律的学習意欲を高める教育の実践につながっている。

○国際基幹教育院

学類	国際基幹教育院（GS教育部門）
取組名称	GS教育系情報交換会
開催日	月に1回（系会議終了後）
参加人数 (概数)	5～15名

国際基幹教育院GS教育系では、FD活動の一環として、毎月の系会議の後に情報交換会を行っている。参加は任意で、毎回5名から15名程度の教員が参加し、お茶菓子をつまみながら和やかな雰囲気の中、思い思いに教育・研究・大学業務など多岐にわたる話題についての情報交換を行っている。GS教育系ではアクティブ・ラーニング型授業や授業の英語化の推進など、新しい教育のあり方を系全体として積極的に模索しており、この情報交換会でも授業実践における悩みや工夫の共有が頻繁に行われている。

また、非常に多岐にわたる専門性をもつ教員が、それぞれの研究内容や関心事を共有することで、教員間での相互理解やコミュニケーションが促進されるとともに、学際的な共同研究の可能性が模索される場所にもなっている。



2019年5月23日のGS教育系情報交換会の様子

1-4 <ピックアップ>特色あるFD活動

学類	国際基幹教育院（外国語教育部門）
取組名称	言語科目の受講が困難な学生への支援にかかわるFD活動 （テーマを決めて年間を通して行うFD活動）
開催日	令和元年6月20日（木）、（令和2年2月3日（月））、2月13日（木）、 2月14日（金）（2月3日は、国際基幹教育院全体のFD研修会）
参加人数 （概数）	合計34名（外国語教育部門主催の研究会のみ）
本学では近年、コミュニケーションが苦手な学生や、障がいがある学生など、言語科目の受講が困難な学生が増えている。そこで、外国語教育部門では、受講困難な学生への支援をテーマに、年度を通して一連のFD活動を行った。 障がい学生支援室との連携（通年） 学期初めの相談、学期中の相談、学生の様子・支援方法の情報共有 EAP Workshop 1（6月20日） EAP担当教員間で障がいのある学生への対応・支援について情報共有・議論 国際基幹教育院FD研修会（2月3日） タイトル：Supporting Students with Special Needs（英語による報告） 障がい、感覚過敏症、コミュニケーションの問題などで受講が困難な学生への対応・支援事例の共有 初習言語科目研究会（2月13日） 初習言語科目の受講が困難な学生への授業内外の支援対応の共有・議論 シラバス改訂会議（11月～2月） EAP教育企画部で、障がいのある学生や受講困難な学生に関するシラバス・教員マニュアルへの記載について議論 EAP Workshop 2（2月14日） 次年度のEAPのシラバス・教員マニュアルの記載について説明・議論	
	

1-4 <ピックアップ>特色あるFD活動

学類	国際基幹教育院（高等教育開発・支援部門）
取組名称	第2回国際基幹教育院FD
開催日	令和2年2月3日（月）
参加人数 （概数）	20名

令和元年度第2回の国際基幹教育院FDとして、3名の報告者が、英語で話題提供を行い、20名の参加者でディスカッションを行った。菊谷まり子准教授は「パーソナリティ心理学」の授業におけるアクティブ・ラーニングの手法について、大藪加奈教授は、英語の授業でアクティブ・ラーニングへの参加が困難な学生への対応について整理し、吉永契一郎教授はデザイン思考の意義について報告した。このFDには、数名の英語話者も参加し、今後、英語を用いたFD活動を展開する上でのテスト・ケースとなった。



【全学のFD研修会】

「英語による授業担当者のためのFD研修会」

1. 概要

主 催	授業科目英語化に関するWG，国際基幹教育院スキルアップセンター
後 援	教育企画会議FD委員会
趣 旨	本学の需要にマッチした，英語で教えるために必要な英語表現・スキル・手法を学ぶことに特化した短期集中型の研修プログラムを，British Council への委託により実施する。
対 象	全学

2. プログラム

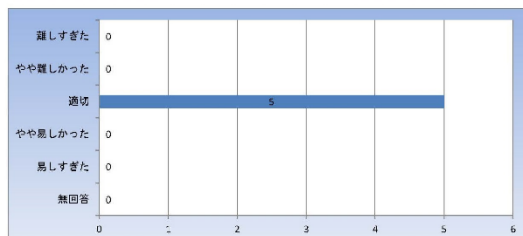
受講テーマ	講義とプレゼンテーション（導入）	発音と Global Englishes	アカデミックライティング（導入）
日 時	令和元年9月3日（火）	令和元年9月4日（水）	令和元年9月5日（木）
	9時00分～16時30分		
会 場	総合教育講義棟 A1 講義室		
参 加 者	7名	13名	9名
授業の概要	英語での講義やプレゼンテーションを行うにあたり，明確で論理的，かつ分かりやすい英語の表現を学ぶ。また，学生の理解を助ける効果的なビジュアル，声，ボディーラングエージの使い方を学ぶ。	日本人学習者が間違いやすい英語の発音の特徴に関する認識を高め，Global Englishes（世界中で使われている様々な種類の英語）を聞き取る練習をし，異なる発音の特徴の分析方法を理解する。	論理的，かつ首尾一貫した分かりやすいアカデミックライティングの書き方について学ぶ。また，引用やヘッジングの方法など，英語によるアカデミックライティングの基本的手法についても習得する。
プログラム			
9:00-10:30	準備と構成	リスニング，英語の発音の特徴を認識する	構成，導入，結論
10:45-12:15	一貫性	英語の発音の特徴の分析及び練習	段落構成
13:15-14:45	ビジュアルを使う	日本人学習者にとって難しい点	引用，要約，言い換え
15:00-16:30	実際に行う	Global Englishes の聞き取り	ヘッジング

1-4 <ピックアップ>特色あるFD活動

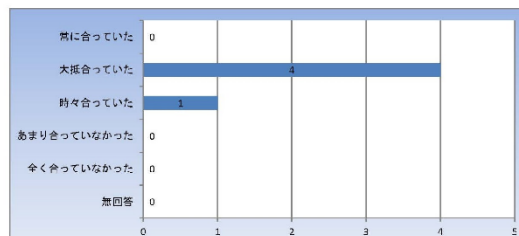
3. アンケート結果（抜粋）

●令和元年9月3日（火）講義とプレゼンテーション（導入）

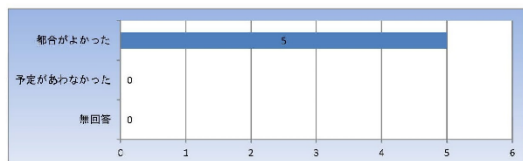
Q1 研修のレベルは適切でしたか。



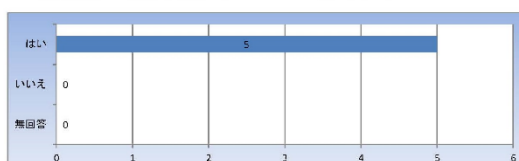
Q4 研修内容はご自身のニーズに合っていましたか。



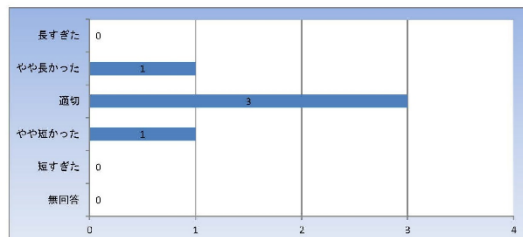
Q2 曜日、時間のご都合はいかがでしたか。



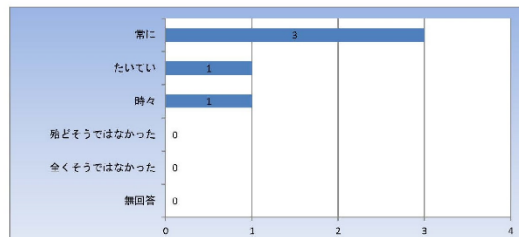
Q5 この研修を履修して英語力、英語スキルが上がったと思いますか。



Q3 研修期間は適切でしたか。

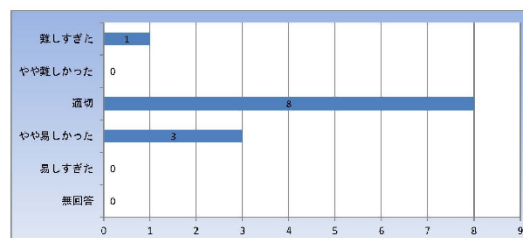


Q15 研修で行ったアクティビティは役に立ちましたか。

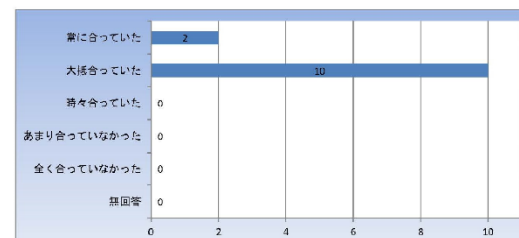


●令和元年年9月4日（水）発音と Global Englishes

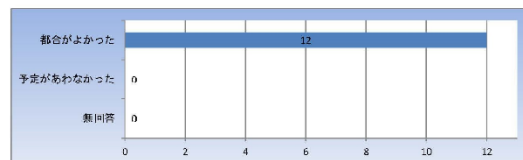
Q1 研修のレベルは適切でしたか。



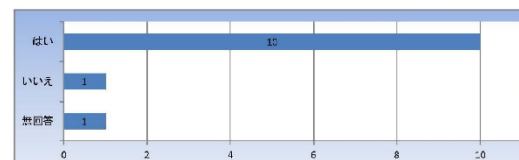
Q4 研修内容はご自身のニーズに合っていましたか。



Q2 曜日、時間のご都合はいかがでしたか。

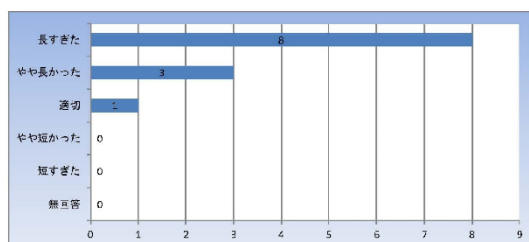


Q5 この研修を履修して英語力、英語スキルが上がったと思いますか。



1-4 <ピックアップ>特色あるFD活動

Q3 研修期間は適切でしたか。

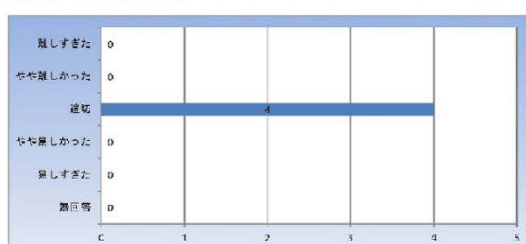


Q15 研修で行ったアクティビティーは役に立ちましたか。

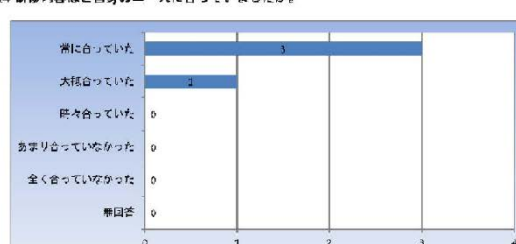


●令和元年9月5日（木）アカデミックライティング（導入）

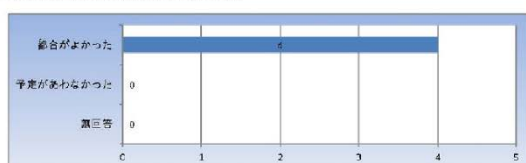
Q1 研修のレベルは適切でしたか。



Q4 研修内容はご自身のニーズに合っていましたか。



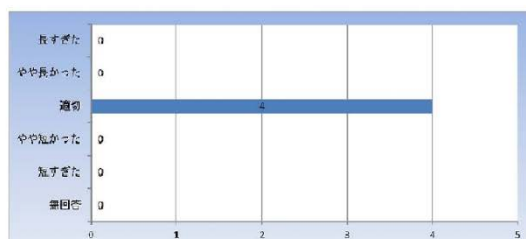
Q2 曜日、時間のご都合はいかがでしたか。



Q5 この研修を履修して英語力、英語スキルが上がったと思いますか。



Q3 研修期間は適切でしたか。



Q15 研修で行ったアクティビティーは役に立ちましたか。



4. まとめ

本研修会は、英語による授業科目の拡充の取組の一環として、平成29年度から毎年実施しているものである。アンケート結果にもあるとおり、レベル、ボリューム、ニーズ等いずれも概ね適切であり、英語スキルが上がったと回答した教員が多く見られた。研修内容が好評であったことから、次年度研修会に繋げていく。

1－5 国際基幹教育院 高等教育開発・支援部門の活動

【部門の活動指針】

国際基幹教育院高等教育開発・支援部門は、金沢大学国際基幹教育院規程第 13 条第 1 項において同規程第 3 条第 1 項 9 号「教育方法，教育システム及び教育支援に関する研究開発並びに教育に係る質保証システムの研究開発」に係る業務を担当する。

より具体的な業務については、

- (1) 学習成果達成度の分析に関すること
- (2) 教学情報の分析に関すること
- (3) 教育プログラムの研究，検証及び改善支援に関すること
- (4) 教育方法・教育支援方法の研究，検証及び改善支援に関すること
- (5) 学習支援・学生支援方法の研究，検証及び改善支援に関すること
- (6) その他内部質保証マネジメントに関すること

についての研究開発を行うとともに、「本学の教育方法，教育システム及び教育に係る質保証システムに関する提言を行う(金沢大学国際基幹教育院高等教育開発・支援部門細則第 3 条)。」

これらに基づき，高等教育開発・支援系/部門は，本学における教育の企画・実践・評価・改善に直接的に関わるとともに，関係部署への支援を行っている。

【令和元年度の活動】

令和元年度においては，本部門の規程・細則に基づく FD・SD 活動を，大学教育再生加速プログラム(AP 事業)，スーパー・グローバル大学創成支援事業(SGU)，大学コンソーシアム石川教職員研修専門部会とともに実施した。

① 全学 FD

- 初任者研修（4 月 3 日）吉永契一郎（部門長）70 名
- ブリティッシュ・カウンシルによる教員向け英語研修（9 月 3 日～5 日）29 名
- 第 1 回全学 FD 研修会（11 月 20 日）大藪加奈（外国語教育部門）20 名
- 第 2 回全学 FD 研修会（11 月 22 日）秋田純一（電子情報通信学類）原怜史（医学教育研究センター）20 名
- 教育実践報告会（3 月 27 日）中野涼子（国際学類）牛島顕（数物科学類）小林俊一（地球社会基盤学類）倉知慎（医学類）18 名

② 部門の企画による FD

- 「メイカー・ムーブメントとアメリカの中等教育」（9 月 15 日）秋田純一（電子情報通信学類）・吉永契一郎（高等教育開発・支援部門）10 名
- “Challenges in Higher Education: Online /Distance Education, International Students, Contract Cheating”（11 月 5 日）Henrik Pallos (Central Queensland University) 20 名
- 「金沢大学のベンチマーキング」（12 月 11 日）上畠洋祐（新潟大学・学生支援機構准

教授) 7 名

- 「高大接続の課題と可能性」(12 月 22 日) 渡會兼也(金沢大学附属高等学校) 斉藤準(帯広畜産大学・人間科学研究部門)・鈴木久男(北海道大学。理学院) 60 名
- 「IR 経験者から見たガバナンスの大学間比較」(12 月 11 日) 上畠洋祐(新潟大学・学生支援機構准教授) 7 名
- 「認証評価の傾向と対策」 畠田敏行(茨城大学・全学教育機構准教授)(2 月 28 日) 3 名
- 第 1 回スキルアップ・センター研究会「授業評価アンケート」(5 月 17 日) 7 名
- 第 2 回スキルアップ・センター研究会「授業評価アンケート」(6 月 13 日) 6 名
- 第 3 回スキルアップ・センター研究会「授業評価アンケート」(7 月 24 日) 7 名

③ 学内 FD 研修担当 (FD ランチョン・FD ワークショップを除く)

- 第 1 回国際基幹教育院 FD (9 月 26 日) 小林恵美子(GS 教育系) 垣内康孝(GS 教育系)・ダガンさかの(外国語教育系)・菅野磨美(外国語教育系) 50 名
- 金沢大学保健学系 2019 年度第 3 回 FD 研修会(12 月 4 日)「アクティブラーニングとその学習評価：形成的評価・パフォーマンス評価・透明性を備えた課題・真正の評価論に焦点をあてて」 杉森公一
- 第 2 回国際基幹教育院 FD (2 月 3 日) 菊谷まり子(GS 教育系)・大藪加奈(外国語教育系)・吉永契一郎(高等教育開発・支援部門) 40 名
- 地球社会基盤学系 FD 研修会(3 月 2 日) 杉森公一・河内真美・小林俊一(地球社会基盤系)

④ 大学教育再生加速プログラム (AP 事業) による研修 (FD ランチョン 13 回・FD ワークショップ 3 回, 延べ参加者数 109 名)

FD ランチョン

- 「アクティブ・ラーニング入門」(5 月 27 日) 杉森公一 6 名
- 「グループ学習」(6 月 5 日) 河内真美 2 名
- 「アクティブ・ラーニングを支える図書館リソース」(6 月 11 日) 橋洋平 9 名
- 「Peer-Assisted Learning を組み込んだ授業づくり」(6 月 24 日) 河内真美 3 名
- 「ALA が参画する授業の実践」(7 月 2 日) 小林恵美子・笠原出帆 9 名
- 「クリッカーを活用した授業実践」(7 月 8 日) 横山明彦 8 名
- 「課題の作り方」(7 月 17 日) 杉森公一 12 名
- 「学修ポートフォリオ・学修カルテ」(7 月 25 日) 堀井祐介 10 名
- 「反転学習」(11 月 25 日) 杉森公一 6 名
- 「学生を自律的な学習者へと促すには-学習科学の知見から考える-」(1 月 20 日) 杉森公一 10 名
- 「留学生を対象にした, 金沢大学でのライティング教育の実践例」(1 月 31 日) 深川美帆・小島荘一 14 名

FD ワークショップ

- 「授業時間外学習を促す課題の作り方（7月26日）杉森公一・河内真美 6名
- 「授業設計ワークショップ」（9月10～12日）富永良史・杉森公一・河内真美 10名
- 「反転授業ビデオの作製とクラウドサービスの教育利用」（1月20日）杉森公一・河内真美 4名

学外での活動

- 堀井祐介，大学評価研究所「第2回公開研究会」，「教育プログラム評価の国内外の動向（現状と課題）」（9月27日，工学院大学新宿キャンパス）
- 堀井祐介，AP大学教育再生加速プログラム(AP)テーマI・II複合型採択校合同シンポジウム「アクティブ・ラーニングに基づく学修成果の把握：質的，量的の両面から」（10月6日）
- 杉森公一，2019年度初年次教育実践交流会 in 北陸・パネルディスカッション・コーディネーター（5月11日）
- 杉森公一，和歌山大学COC+「プログラム全体の評価とループリック」（9月6日）
- 杉森公一，国立大学理学療法士・作業療法士教育施設協議会 特別講演「アクティブ・ラーニングによる探究的学びの学修支援」（9月12日）
- 杉森公一，日本高等教育開発協会・2019年度第1回研究会（9月19日）
- 杉森公一，佐賀大学全学教育機構クリエイティブ・ラーニングセンターフォーラム第4回「反転学習を支える授業設計とファシリテーション」（12月15日）

特色ある取組等

平成元年度まで，金沢大学は文部科学省の大学教育再生加速プログラム（AP事業）採択校としてアクティブ・ラーニングに係る多様な取組を展開してきた。今後は，そこで育成されたFDリーダーが，継続して，各部局のFDに取り組む予定である。また，同じくAP事業で育成されたアクティブ・ラーニング・アドバイザー(ALA)についても，学修支援の一部として継続される。ALAについては，大学教育学会課題研究（国内7大学参加，平成30～令和2年度）に採択されており，効果検証を進めている。さらに，石川県は大学コンソーシアム石川による大学間連携が進んでおり，FDについても，今後，地域連携を進める。

2 各部局等のFD活動

2-1 照会事項1 平成30年度に提案された予定・課題の達成度

【検証事項1】平成30年度に提案された予定・課題の達成度

昨年度実施した検証事項2の予定・課題の達成度について、取りまとめる。

「平成30年度金沢大学におけるFD活動に関する報告書」（抜粋）

照会事項6 学修成果に関するアンケート結果等に基づく教育課程・教育内容・教育方法の検証

【検証事項2】:授業評価アンケート及び平成30年度卒業者に対するアンケートといった各種アンケートの集計結果等を踏まえ、令和元年度に行われる教育方法の改善など教員の教育能力の向上のための組織的取組の計画について、具体的に記載してください。

○人文学類

【検証事項2 (平成30年度)】 予定・課題	平成30年度の卒業者アンケートの結果を見ると、学修成果を問う学類共通項目（Q1-Q10）についてはQ5を除くすべての項目で「1.そう（身につけたと）思う」「2.ややそう思う」の合計が80%以上を占めており、人文学類の卒業者が総合的に見て高いレベルを達成していることがわかる。ただし、Q5「プレゼンテーションの能力を磨くことができた」が全体で66%にとどまったことは今後の課題であり、学生のプレゼンテーション能力をさらに高める努力が必要と思われる。この点はアクティブ・ラーニングの積極的な導入や公開授業の有効な活用などを通じて、令和元年度のFDの課題として取り上げる予定である。 また、各コースが定める学修成果についても、ほとんどの項目で「1.十分に達成している」「2.ある程度達成している」の合計が80%以上を占めているが、一部で達成度が十分でない項目については各コースで対策を検討するようにFD委員会より依頼する予定である。
達成度	前年度に課題としてあげたアクティブ・ラーニングの積極的な導入については、前年度のFD研修会においてもテーマとして取り上げたり、前年度および今年度の公開授業後の情報共有によって学類内の多くの教員が問題意識を共有するようになったと思われる。また今年度の実績として、これまで人文学類においては実績ゼロだったALA（アクティブラーニングアドバイザー）の導入が、1例だけではあるが初めて行われた。その成果は今年度末におこなわれたFD研修会でも報告され、多くの教員がALA導入の意義を理解したと思われる。また、シラバスにもアクティブ・ラーニング（及びそれを意味する内容）の記述が多く見られ、人文学類教員の間でのアクティブ・ラーニングの導入は少しずつ進んでいると思われる。また、前年度の卒業者アンケートの結果、達成度が十分ではなかった項目（Q5「プレゼンテーションの能力を磨くことができた」）が見られたコースに対しては、FD委員会からその事実を知らせるとともにコースとしての改善方法の回答を求めた。その結果、該当するコースからは、演習の授業において、発表・プレゼンテーションの機会のフィードバック指導をより活性化していくこと、また学生には特にプレゼンテーションに関する授業を履修するよう強く勧めるという回答を得ることができた。その取組みの効果として、卒業者に対するアンケートを見ると、新型コロナウイルスにより学位記授与式が中止された影響でアンケート回答者数がかなり少なくなったため正確な判断はできないかもしれないが、Q5について肯定的評価が7割を超えられなかったことは反省すべき点ではあるとしつつも、昨年度評価が5割を下回っていた2コースが6割以上と上昇に転じていることから一定の効果はあったと判断できる。

○法学類

【検証事項2 (平成30年度)】 予定・課題	就職・進学等に要する知識・能力の修得により資するべく、現在実施中の法務研との連携強化の着実な実施を図るとともに、法律実務にも結びつき得る教育内容の具体化を検討する。
達成度	実践的能力修得のための法務研究科との連携強化（授業内容の実質化、成績評価の厳格化等）を行ってきた。具体的には、法学類では法曹養成プログラム（いわゆる法曹コース）を設け、本学法務研究科との法曹養成連携協定の文部科学省による認定を受けられる水準を目指した。その結果、文部科学省から法曹養成連携協定の認定を受けることができ、高度な授業内容の実質化、成績評価の厳格化等が達成できたと判断できる。

○経済学類

【検証事項2 (平成30年度)】 予定・課題	前年度卒業生アンケートから「社会人に必要なコミュニケーション能力、IT能力、プレゼンテーション能力、ディベート能力を身につける」の点で課題があることが判明した。それを踏まえて、経済学類の教員がアクティブ・ラーニングを積極的に実施した。その結果、今年度の卒業生アンケートではそれらの項目について改善を確認できた。
達成度	2018年度卒業生アンケートから「社会人に必要なコミュニケーション能力、IT能力、プレゼンテーション能力、ディベート能力を身につける」の点で課題があることが判明した。それを踏まえて、経済学類の教員がALA（アクティブ・ラーニング・アドバイザー）を活用した授業やインターネット教材＋グループ学習を併用したアクティブ・ラーニングを開始し、アクティブ・ラーニングを積極的に実施した。その結果、2019年度の卒業生アンケートでは、それらの項目について卒業生から「十分」と「ある程度」を合わせた「達成している」の評価割合が前年度の約7割から約9割への向上が見られ、改善を確認できた。

○学校教育学類

【検証事項2 (平成30年度)】 予定・課題	学校教育学類卒業生の学修成果の達成については、ほぼ問題はないと判断される。しかし、敢えて指摘するならば、本学類の学修目標の「(3) 学校教育・学校組織とそれを取り巻く 現代社会と世界の諸問題について、理解し判断することができる」の卒業生アンケートの達成度自己評価が比較的低く、かつ学類4年次の授業科目成績が昨年度に比べわずかが低下していること、「(4) 自己の教員としての資質を省察し、個性的な教員としての自己像を目指すことができる」の卒業生アンケートの達成度自己評価が比較的低いことや、卒業生アンケートの学類独自の質問項目の中のためノートの取組状況があまり良くない、教員以外の進路となったものが比較的多いという結果が得られたことから、昨年度に継続して附属学校園連携GPによる学校インターンシップ開発やFD研修会、FD研究授業において、上記の改善に向けた取組を行うほか、なるためノート改善の基礎資料となる使用実態や改善に関する調査を実施することとした。
達成度	令和元年度は、当初計画を上回る3回のFD研修会を実施し、1回のFD研究授業、附属学校園連携GPによる学校インターンシップ開発、なるためノート改善の基礎資料となる使用実態や改善に関する調査を当初計画通り実施した。FD研修会では、昨年度卒業生アンケートにあった課題を踏まえた教員の教育能力の向上を目指し、第1回研修会で、学校教育・学校組織とそれを取り巻く現代社会と世界の諸問題への知見を高める目的で、大阪大学の栄藤稔氏による「AIの進化とSociety 5.0時代に求められる人材教育」というタイトルの講演、第2・3回研修会で、現在本学類で行われている教員養成に関する先駆的な取り組みの紹介と教員養成学部としての大学授業のあり方についてのディスカッションを行った。FD研究授業では、様々な専修に所属する教員が参加し活発な議論がされた。学校インターンシッ

	ブ開発では、計4つの学校教育学類教員と附属学校園が連携して学生指導に取り組む4つのインターンシップ・プログラムが開発された。なるためノート改善の調査は、一昨年、昨年の卒業生アンケートの分析に加え、学類3年次に対して新たにアンケート調査を実施し、なるためノートへの学生の意識や今後の課題についての基礎資料が得られた。
--	--

○地域創造学類

【検証事項2 (平成30年度)】 予定・課題	Q1に関して、全体的に回答率が低く、コース間での回答率の差異が目立つ。最も回答率が高い「福祉マネジメントコース」は53.13%であるのに対して、最も回答率が低い「環境共生コース」は9.38%である。なぜこうした差異が発生するのか不明であり、来年度以降の検討課題としたい。Q2に関して、選択した進路は別に調査しているので特記することはないが重複項目が必須入力であることはアンケート設計上の問題があると考え。Q4について2019年4月からの生活予定地は出身市町村内が50%、出身都道府県が12.5%と地元志向が強いことをデータが示している。具体的には石川県が多い。Q6の質問項目は意図が不明である。なぜなら、ハンドブックやホームページに記載している「地域創造力」という言葉を聞いたことがあるかどうかを質問で聞くこと自体がナンセンスだと言わざるを得ないからである。Q7の「地域を創造する力」が修得できたという質問に78.13%が「少し修得できた」とあり、これは実際に授業で学んだ内容と「地域を創造する力」との関連が理解できていない卒業生が多いという解釈がありうる。地域創造学類が提供する各授業において「地域を創造する力」と授業内容をリンクさせることを各教員に求める対応を検討したい。Q8～15にかけて、個別の学修成果は「ある程度達成している」がどの質問でも高い。「十分に達成している」のパーセンテージを高めるように各授業内容を改善する必要があり、来年度以降の検討課題としたい。Q16～22は自由回答によるものだが、フィールドワーク・まちづくりインターンシップ・社会福祉士実習等の地域創造学類の特色ある取り組みが印象に残っているようであり、これらの点は継続する価値があることが示されていると考える。これらを踏まえて、今後は設問の見直しを行う計画である。
達成度	前年度の卒業生アンケート質問事項であった「「地域創造力」という言葉を聞いたことがあるか」を削除というアンケートの一部と変更を行い、「地域を創造する力」を修得できたと思うかどうかを主軸においた。同時に、今年度の取り組みとして、導入的科目である授業科目「地域創造学Ⅰ～Ⅳ」を中心に「地域を創造する力」との授業内容のリンクを高めるように工夫した。例えば、「地域創造学Ⅰ～Ⅳ」では、地域の実態・課題・可能性の紹介にとどまっていた面が強かったが、地域分析のための諸統計の活用方法・調査手法の紹介も加え、学生が主体的に地域の理解を深められるよう授業内容に工夫を加え、シラバスの記載も充実させた。2019年度の卒業生アンケートでは前年度とほぼ横ばいの評価結果だったが、取り組みを始めたばかりであり、今後の効果を期待している。

○国際学類

【検証事項2 (平成30年度)】 予定・課題	国際学類は語学を学ぶ学類という印象が学生間では強いようであるが、語学を使って何をするのか、目的意識を強く持たせることが肝要である。そうしたことが留学体験の実質化や、学生自身のキャリアパス形成意識の強化につながる。アンケートで露呈した、予習・復習時間の乏しさも、こうした語学以外の知識の習得に対する目的意識の低さが原因となっていると考える。アクティブ・ラーニングの一層の導入や、一週間に2回の授業を実施するクォーター制の実質化を活用し、学生の学習の自発的な取組を促進していく予定である。
達成度	学類FD活動における新たな課題の出現に対応する中、「外国語を学ぶ」から「外国語で学ぶ」への学生の意識改革という大テーマにつき、詳細な検討を行うことができなかった。ただ前年度の検討事項の具体的前提として言及されている、「クオ

	ーター制の実質化」については、本年度第1回FD研修会（「国際学類におけるクォーター制導入の実質化について」：令和元年7月30日実施）において突っ込んだ討論を行った。また「語学以外の知識の習得」という観点から、本学類における社会科学系教科学習の基礎の習得に、今後導入予定の授業「数理データサイエンス」をいかに活用するかを主題に、第2回FD研修会（「国際学類における情報処理教育の展望」：令和2年1月7日）を実施した。これらを踏まえ昨年度の検討事項につき、完全ではないが比較的高い達成度が得られたと考えている。
--	--

○数物科学類、数物科学専攻

【検証事項2 (平成30年度)】 予定・課題	平成30年度卒業生に対するアンケートでは、各コースの基礎的分野の理解度に関する質問への達成度自己評価が比較的低い。授業方法については各教員が常に改善を試みていると考えるが、ティーチング・アシスタント(TA)やアクティブ・ラーニング・アドバイザー(ALA)の効果的かつ効率的な運用を、今後も検討していきたい。
達成度	TA, ALAを積極的に利用して問題演習や補習的講義を行い、学生の理解度・習熟度を向上させる取り組みを行った。授業評価アンケートの結果からも、その有効性が確認できた。

○物質化学類、物質化学専攻

【検証事項2 (平成30年度)】 予定・課題	「将来、独自に問題解決に取り組む自信ができましたか」について、平成30年度卒業生による達成度自己評価が比較的低いことから、卒業研究をはじめとする研究室での教育とともに、授業科目における能動的学修を促す教育方法の拡充が必要と考えられる。この点については、令和元年度のFDの課題として取り上げ、教育方法に関する情報共有、ワークショップ等の実施を通してアクティブ・ラーニングを促す授業設計についての検討など、教員の教育能力の向上に向けた対応をとる。
達成度	学類内におけるFD課題研修会において、アクティブ・ラーニングを促す授業設計について検討し改善点について共有した結果、専門科目へのALAの導入を行うことができた。また、卒業研究に関するアンケート結果について検討し、研究室における教育方針について十分な確認ができた。

○機械工学類、機械科学専攻

【検証事項2 (平成30年度)】 予定・課題	学類生については、機械工学の基礎的分野に関しては「ある程度達成」以上の評価が多いが、応用分野に関しては「あまり達成していない」の評価が若干増える傾向が見られた。機械系では網羅すべき分野が広いこと、学類の教育課程では応用分野に十分な時間を割けないのが現状である。学類の講義でも応用分野に触れるような工夫が求められる。しかし、修士課程修了者では基礎的分野だけでなく応用分野でも「十分に達成している」の評価が多くなったため、大学院講義、研究指導により教育効果が高まることが分かる。
達成度	・改組に伴う科目変更、講義内容変更が続いているため完全な検証は行われていないが、分野毎の検討を行い当該分野に関わるカリキュラム改革方針などを担当教員間で共有した。 ・学類会議にてアクティブ・ラーニングの積極的導入を促し、各教員の意識が高まった。 ・授業アンケート回答率向上のための具体的手法を周知し、回答率向上に協力する教員数が増加した。

○フロンティア工学類

【検証事項2 (平成30年度)】 予定・課題	まだ、学類未配属の1年次しか在籍していないため、新学類の講義や卒業者に対するアンケートは実施していない。授業評価アンケートは来年度から開講される講義に対して実施を行う。卒業生に対するアンケートについては最初の卒業生に対する実施を検討している。
達成度	今年度から開講される科目の多くで授業評価アンケートを実施した。卒業生はまだいないので、一期生卒業に向けて検討する予定。

○電子情報通信学類（電子情報学類）、電子情報科学専攻

【検証事項2 (平成30年度)】 予定・課題	いずれのコースにおいても、一部の質問項目で、「あまり達成していない」の回答が約20%を超える項目が見られた。原因や対策について、今後系会議などでの検討を行いたい。 専攻：半数以上の学生が「ある程度達成している」と回答しているが(4)については「あまり達成していない」と回答している学生が多い。ディスカッションや英語を取り入れた授業の拡充を検討したい。
達成度	問題となった項目全てについては対応できていないが、下記の内容については、検討・対応がなされた。 ディスカッションを取り入れた授業については、令和元年度に学類科目であるがALAを採用し、アクティブ・ラーニング・ディスカッションを積極的に活用した科目があった。さらに大学院の科目についても拡充を図っていききたい。英語を取り入れた授業については、科目数も増えているため、拡充がなされていると考えられる。

○地球社会基盤学類（環境デザイン学類）、環境デザイン学専攻

【検証事項2 (平成30年度)】 予定・課題	環境デザイン学専攻：「ある程度達成している」が回答の半数以上を占めており、概ね悪くない評価である。
達成度	環境デザイン学類の卒業生アンケートでは回答者の9割以上が「十分に達成」「ある程度達成」と評価している。したがって、これまでのカリキュラムは概ね問題なく、引き継ぐ地球社会基盤学類もこの方針で進めて問題ないと考えられることを確認した。また、地球社会基盤学類の授業アンケートでも概ね5段階評価の3~4の回答を得ていることを確認した。

○生命理工学類（自然システム学類）、自然システム学専攻

【検証事項2 (平成30年度)】 予定・課題	「ある程度達成している」が回答の7割以上を占めており、おおむね満足できる状況にあると考える。しかし、回答数が非常に少なく、有効な結論として評価できるかは不明であり、来年度のアンケートの回答率向上について、理工・教育方法改善委員会のほか、学類においても検討する。
達成度	アンケート依頼が出る度に学類内にアナウンスし、アンケート回収率の向上に努めた結果、全般的にアンケート回収率の向上が認められた（達成度90%）。またアンケート回収率の悪い科目については理由の調査を行った。その結果、アンケートの回収の重要性は認められるが、学生にとって多くの科目で多くの項目のアンケートを回答しなければならないことが負担となっていることや、アンケート回収の意義が明確でないために教員側のモチベーションが上がらないことが分かった。

○医学類

【検証事項2 (平成30年度)】 予定・課題	科学的根拠に基づく医療の評価と検証の必要性の理解、地域における医療・保健・福祉等との連携の理解の面で、平成30年度卒業生の達成度自己評価が比較的低い傾向となった。このことから、受動的な座学ではなく、学生が自ら進んで学修するようにアクティブ・ラーニングによる能動的学習の手法が有効な一つとして考える。そのため、平成30年度に実施したFD講習会を令和元年度も継続して実施し、より多くの教員に対して教育方法を学ぶ機会を提供し、教員の教育能力向上に向けた対応を取るようとする。
達成度	アクティブ・ラーニングを推進するために、国際基幹教育院との共催で、医学類及び保健学類教員を対象としてFD研修会を実施した。令和元年度は9回のFD研修会を実施したが、12月以降に実施した3回のFD研修会については、医学類、保健学類のみならず、石川県内の医療系大学である金沢医科大学、金城大学、県立看護大学、小松大学、北陸大学にも門戸を広げ、アクティブ・ラーニングの手法を学ぶ機会に加えて、学内外の教員間で積極的な意見交換等を実施するなど、手法や効果について理解を深めた。

○薬学類・創薬科学類、創薬科学専攻、薬学専攻

【検証事項2 (平成30年度)】 予定・課題	教員の能力向上と新しい教育手法の紹介として、薬学FD研修会では「薬学における反転授業のメリット、デメリット」を51名の薬学教員がスモールグループに分かれて議論した。議論から見出されてきた学生の評価基準の設定、成績の二極化等の問題点が生じる恐れのある授業については導入にデメリットが大きいと考えられるが、適用可能な、あるいはすでに実施している個々の授業・演習には引き続き反転授業を取り入れ、教育方法の向上に努めることとした。 平成30年度薬学類、創薬科学類の学生を対象とした学修成果ごとの授業科目の成績データに基づき、学修成果達成度把握のための分析を行ったところ薬学類では、各学修成果に対応する授業科目群の成績評価の平均が2.8-3.5(成績評定:S:4 A:3 B:2 C:1 不可:0 合:1 否:0)、創薬科学類では2.0-3.0であり、両学類ともB判定以上の学修成果達成度が確認された。また、薬学類については3年次と4年次の成績評価の平均値の比較、創薬科学類については2年次と3年次の成績評価の平均値の比較から、一部の学修成果については、学年進行に伴う学修成果達成度の有意な上昇が確認できる一方、有意な減少は確認できなかった。以上より、両学類のカリキュラムは適切であり、学修成果の達成に十分に効果的であると考ええる。
達成度	平成30年度の薬学FD研修会で取り上げた「薬学における反転授業のメリット、デメリット」を踏まえ、適用可能な個々の授業には反転授業を取り入れ、教育方法の向上に努めた。 なお、平成30年度薬学類、創薬科学類の学修成果達成度分析で、両学類ともB判定以上の学修成果達成度が確認されており、両学類のカリキュラムは適切であり、学修成果の達成に十分に効果的であると考えている。

○保健学類、保健学専攻（博士前期・後期課程）

【検証事項2 （平成30年度）】 予定・課題	卒業時・修了時の達成度の自己評価において、学士課程においては専攻により傾向が異なり「あまり達成していない」、「全く達成していない」の回答が3割を超える回答が散見した。大学院課程では後期課程では達成度は高く、前期課程では若干名の「あまり到達していない」の回答がある。 前期課程は学士課程からの進学者があり、臨床での実践力における自信のなさが伺える。臨床実践力を包含した教育について各教員が意識を高める必要がある。 学士課程において、卒業時の達成度の向上のため、アクティブ・ラーニング等の取り組みは引き続き行うが、アクティブ・ラーニングによって学生が得た能力の評価について考える必要があり、どのように評価するかについての知見を広げる機会（研修会等）を得る。また、回答（回収）率との関連もあると思われる、学生への回答協力を呼びかける。
達成度	アンケートの結果が未集計であるため、回収率および到達度の結果については言及できない。学士課程、博士課程（前期・後期）において、アンケートの協力依頼は担任や指導教員から、また保健学務係を通して全学生には行えたものとする。 アクティブ・ラーニングの取り組み推進については、保健学FD研修会において研修会を実施し、さらに高大接続WGを中心に5専攻横断型の高大接続プログラム・講義を実施した。この講義は1年次に対するものであり、今後学年進行に伴い、学生が自律的に専門職者としての意識・知識の向上に努め、国家試験合格率として成果に表れるものとする。

○人間社会環境研究科

【検証事項2 （平成30年度）】 予定・課題	アンケート結果及び懇談会での挙げた意見を踏まえ、FD研修会を通して、留学生対応や論文指導の充実といった点を中心に各授業の充実、各授業間の連携に努める。
達成度	予定通り、アンケートを行い、それに沿ったFD研修会を行った。平成30年度アンケートにおいて前期課程では論文を学会誌に投稿したという回答が希であった。令和元年度は、博士前期課程学生の投稿を促進するよう、研究科の体制を整える予定であったが、研究会への参加を促進するに留まった。

○新学術創成研究科

【検証事項2 （平成30年度）】 予定・課題	—
達成度	北陸先端科学技術大学院大学先端科学技術研究科融合科学共同専攻との合同FD研修会を令和2年3月27日（金）に開催し、当初の目標を達成した。 また、シラバスについて、全授業科目の全項目が記載されているかを確認し、全て記載されていることを確認できた。

○医薬保健学総合研究科（修士課程・医学博士課程）

【検証事項2 （平成30年度）】 予定・課題	アンケート結果では、学生自身の達成度に係る自己評価は概ね高く、大学院教育にも満足している者が多かった。特に、基礎研究における手技や知識の修得及び他分野の教員とのディスカッションを有意義だったと答えた学生が多かったが、その一方で、国際学会発表のための英語教育など、さらに実践的な指導を求める声も少なくなかった。今後も授業科目やセミナーにおいて、学生の研究者としての能力向上を図るため、担当教員はFD研修会等により教育能力を向上していくこととする。
達成度	令和元年度に実施したアンケート結果でも、学生自身の達成度に係る自己評価は概ね高く、大学院教育に満足している者が多かった。また、課題となっていた国際学会発表のための英語教育などの実践的な指導についても各分野で、可能な限り英語によるディスカッションを行ってもらい、一定の成果を上げられたものと考えている。

○法務研究科

【検証事項2 （平成30年度）】 予定・課題	アンケート結果は全教員で共有し、アンケート結果への速やかな対応、学生への返答を行う。また、学内でのFD研修会、弁護士との意見交換会、他大学との合同FD研修会も継続して開催する。 令和元年度から実施される新カリキュラムでは、運用状況を確認し、問題点があれば速やかに検討することとする。なお、時間割やCAP上の問題には、既に対応している。
達成度	達成された。 例年通り、前期・後期とも中間アンケート・期末アンケートを実施した。中間アンケートについては、各教員に対し、授業科目についての学生からのコメントへの返答と対応を求めると同時に、各委員会に対し、学生から寄せられた意見への対応の協議・対応を依頼し、結果を学生に文書で告知している。期末アンケートについては、各教員にアンケート結果を踏まえた報告書を作成してもらい、それをすべて共有した上でFD研修会の議題としている。 FD研修会は年に2回開催している。昨年度は、アンケート結果と報告書の検討のほか、連携先の一橋大学進級テストの利用について、カリキュラム改正の方向性についてなどを話し合った。 弁護士との意見交換会も年に2度開催し、昨年度は合宿や弁護士チューター、自習支援、自主ゼミなどの学生支援のあり方について、未修者指導と論文指導についての意見交換を行った。 合同FD研修会については、筑波大学および一橋大学と、それぞれ未修者教育の充実についての研修会を行った。

○教職実践研究科

【検証事項2 （平成30年度）】 予定・課題	本学附属学校園で実施される「学校実習I」では、附属指導教員と実習院生の間で情報交流・意思疎通が十分できていない状況があるため、それらの改善策を立て、実行する。
達成度	学校実習Iが開始する2週間前に実習生全員を集め、情報交流・意思疎通に関する具体的なアドバイスを記載した資料を配布し、口頭で説明を行った。また、実習受け入れ校である附属学校園の教職員に実習生の自己紹介パンフレットを事前に配布し、スムーズな受け入れを図った。実習結果は良好で、かなりの程度課題達成ができた。

○国際機構

【検証事項 2 (平成 30 年度)】 予定・課題	—
達成度	授業評価アンケートで出された教員の言動についての問題点を踏まえ、当該の問題に関連した FD 研修会（FD 研修会「民主的シティズンシップ教育と日本語教育」が該当）を行い、授業担当者の意識向上、授業内容改善の一助とした。

2-2 照会事項2 シラバス記載要領の対応状況

金沢大学では、全学統一の様式（後掲：4 資料編「金沢大学シラバス様式」参照）を用いて、シラバスを作成している。

【検証事項1】令和元年度の実施状況

1) シラバスの点検①（アクティブ・ラーニング型の授業の構成の記載）

実施状況 ◎：実施した，○：一部点検した，△：実施検討中，×：点検しなかった，―：今年度実施対象外

部局名	実施状況	◎及び○の場合は、活動内容及び達成状況、 ×の場合は、点検しなかった理由、点検実施に向けた目標 及び達成時期
人文学類	○	教務係より配信された「シラバス入稿要領」にしたがって、各コースからピックアップした一部の授業について人文学類 FD 委員長が点検をおこなった。
法学類	◎	FD 委員が確認した。
経済学類	◎	学類 FD 委員会で AL 型の授業の構成の記載があるかどうかを含めてシラバスを点検し、改善の必要な教員には連絡して、改善を確認できた。
学校教育学類	◎	FD・カリキュラム委員会が作成したシラバス点検マニュアルに基づき、学校教育学類に設けられた 11 専修の教員同士でのピアレビューにより点検をした。
地域創造学類	◎	FD 委員会で確認した。
国際学類	◎	教務・学生生活委員会が主体となり、アクティブ・ラーニング型授業に関し、その実施の手順等がシラバス上に具体的に記述されているか確認し、不十分なものについては各教員に、個別に修正を提案した。
数物科学類 数物科学専攻	○	新たにクォーター化された 4 年次科目を重点的に点検し、それ以外は既存のものを使用した。
物質化学類 物質化学専攻	◎	各教員がシラバスを確認し、改善に努めた。
機械工学類 機械科学専攻	○	これまでに確認が終了している科目については点検を行っていないが、新たにアクティブ・ラーニングを導入する科目については随時点検を行った。
フロンティア工学類	◎	教育方法改善委員がシラバスの記載内容を点検した。 約 45%の科目に、授業内での演習・実習・グループワーク、ミニツツペーパーの利用などの記載がある。なお、記載項目はまちまちである。 約 73%の科目に予習の指示が、84%の科目に復習の指示がある。一部の科目では、授業概要などにも予習・復習の記述がある。一方、予習・復習の少なくとも片方を必須にしたため、単に「不要」と書かれた科目がある。「90 分の予習と復習」のように、具体性のない記述もみられる。
電子情報通信学類 (電子情報学類) 電子情報科学専攻	○	教務委員主導の下、シラバスの点検が行われた。また、教務委員と FD 委員により、一部科目においてシラバスへのループリック掲載と確認が行われた。

2-2 照会事項2 シラバス記載要領の対応状況

部局名	実施状況	◎及び○の場合は、活動内容及び達成状況、 ×の場合は、点検しなかった理由、点検実施に向けた目標 及び達成時期
地球社会基盤学類 (環境デザイン学類) 環境デザイン学専攻	○	各教員がシラバスを確認した。アクティブ・ラーニングに取り組んでいる授業にも関わらず、その旨、シラバスに記載されていなかった授業もあったため、シラバスへ記載するよう依頼した。
生命理工学類 (自然システム学類) 自然システム学専攻	○	教務委員の指導の下、シラバス入力に関する作成例の周知が行われ、各教員にシラバスを確認と改善を依頼した（全教員が点検したかまでは確認していないため一部点検とした）。
医学類	○	「科目別カリキュラム評価チェックシート」を使用して。カリキュラム評価委員会委員によるシラバスのチェックを行った。
薬学類・創薬科学類 創薬科学専攻, 薬学専攻	◎	記載方法及び記入例を示し、担当教員が各自点検を行った。
保健学類 保健学専攻 (博士前期・後期課程)	◎	シラバス入力期間に周知したほか、科目担当教員によるセルフチェックを行った。
人間社会環境研究科	◎	前期課程各専攻・後期課程各コースに於いて点検を行った。記載漏れ、情報が不足している箇所については個別に連絡し、適宜修正を行った。
新学術創成研究科	○	研究科独自開講科目について、アクティブ・ラーニング型の手法を取り入れているかを確認し、概ね取り入れることができていた。
医薬保健学総合研究科 (修士課程・医学博士課程)	○	担当教員が点検を行った。一部の授業科目においてアクティブ・ラーニングを取り入れた。
先進予防医学研究科 (医学博士課程)	○	担当教員が点検を行った。一部の授業科目においてアクティブ・ラーニングを取り入れた。
法務研究科	◎	分野ごとの教員間でのチェック、教務・学生委員会によるチェックも行われる。
教職実践研究科	◎	教務・FD 委員会が確認した。すべての授業がアクティブ・ラーニング型の授業構成となっていた。
国際基幹教育院 GS 教育部門	◎	GS 科目企画部会委員が各群の科目（自身の科目は他の教員に依頼）を点検し、点検結果を企画部会長あてに報告した。
国際基幹教育院 外国語教育部門	◎	英語科目、初習言語科目とも、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業になっており、演習、グループ/ペア・ワーク、プレゼンテーション、ディスカッション、小テストなどをシラバスのキーワードに記載している。
国際基幹教育院 高等教育開発・支援部門	◎	シラバス にアクティブ・ラーニングが含まれていることを確認した。
国際機構	◎	機構が提供している授業の性質により、基本的にすべてアクティブ・ラーニングを取り入れている。

2) シラバスの点検② (和英併記)

実施状況 ◎：実施した，○：一部点検した，△：実施検討中，×：点検しなかった，—：今年度実施対象外

部局名	実施状況	◎及び○の場合は、活動内容及び達成状況、 ×の場合は、点検しなかった理由、点検実施に向けた目標 及び達成時期
人文学類	○	教務係より配信された「シラバス入稿要領」にしたがって、各コースからピックアップした一部の授業について人文学類 FD 委員長が点検を行った。
法学類	◎	FD 委員が確認した。
経済学類	◎	学類 FD 委員会でシラバス点検、改善の必要な教員には連絡し、改善を確認できた。
学校教育学類	◎	FD・カリキュラム委員会が作成したシラバス点検マニュアルに基づき、学校教育学類に設けられた 11 専修の教員同士でのピアレビューにより点検をした。
地域創造学類	◎	FD 委員会で確認し、一部で英語のシラバスが不十分な科目が見られた。
国際学類	◎	教務・学生生活委員会が主体となり、各教員のシラバス原稿に、十分な和英表記がなされているかチェックを加え、不十分なものがある場合には改善を要請した。
数物科学類 数物科学専攻	○	新たにクォーター化された 4 年次科目については点検を行い、それ以外のものは既存のものを使用した。
物質化学類 物質化学専攻	◎	教務委員主導のもと、「授業の概要」への授業毎の概要の記載をはじめとしたシラバスの記載内容の点検を行なった。
機械工学類 機械科学専攻	○	ほぼ全ての科目について確認し、確認した全ての科目が和英併記されていることを確認した。改組に伴い新規に立ち上げた科目については随時点検を行う。
フロンティア工学類	◎	教育方法改善委員がシラバスの記載内容を点検した。 2020 年度に開講される予定の科目は、一部英語科目に和文が無いものを除いて、全てに和英両方が用意されている。なお、一部に、日本語版に和英 2 か国語を併記したもの、日本語版の一部項目が英語になっているものなど、些細な問題が見られた。編集時の不注意か、2 か国語併記時代の名残と思われる。
電子情報学類 電子情報科学専攻	◎	教務委員主導の下、シラバスの記載内容の点検が行われた。
環境デザイン学類 (地球社会基盤学類) 環境デザイン学専攻	◎	和英併記の点検を行った。ほぼすべての講義シラバスは和英併記となっている。
生命理工学類 (自然システム学類) 自然システム学専攻	○	教務委員の指導の下、シラバス入力に関する作成例の周知が行われ、各教員にシラバスを確認と改善を依頼した(全教員が点検したかまでは確認していないため一部点検とした)。
医学類	○	「科目別カリキュラム評価チェックシート」を使用して、カリキュラム評価委員会委員によるシラバスのチェックを行った。
薬学類・創薬科学類 創薬科学専攻、薬学専攻	◎	記載方法及び記入例を示し、担当教員が各自点検を行った。
保健学類 保健学専攻 (博士前期・後期課程)	◎	和英併記は以前から周知してきたが、シラバス入力期間に改めて周知したほか、科目担当教員によるセルフチェックを行った。

2-2 照会事項2 シラバス記載要領の対応状況

部局名	実施状況	◎及び○の場合は、活動内容及び達成状況、 ×の場合は、点検しなかった理由、点検実施に向けた目標 及び達成時期
人間社会環境研究科	◎	前期課程各専攻・後期課程各コースに於いて点検を行った。記載漏れ、情報が不足している箇所については個別に連絡し、適宜修正を行った。
新学術創成研究科	○	研究科独自開講の講義科目について、和英併記としているかを確認し、全て併記できていた。
医薬保健学総合研究科 (修士課程・医学博士課程)	○	担当教員が点検を行ったが、一部の授業科目が未公開だった。
先進予防医学研究科 (医学博士課程)	○	担当教員が点検を行ったが、一部の授業科目が未公開だった。
法務研究科	—	法務研究科はシラバスの和英併記には該当しないため、英語シラバスは義務づけていない。(司法試験は日本語で論じることが求められているため)
教職実践研究科	◎	教務・FD委員会が確認した。英語表記について、科目間で内容・形式の統一性を図ることが課題とされた。
国際基幹教育院 GS 教育部門	◎	GS 科目企画部会委員が各群の科目(自身の科目は他の教員に依頼)を点検し、点検結果を企画部会長あてに報告した。
国際基幹教育院 外国語教育部門	◎	言語科目のシラバスは一律の和英併記ではなく、英語科目では、おおむね英語標記のみ、初習言語科目では、和英併記または学習する言語との併記としている。
国際基幹教育院 高等教育開発・支援部門	◎	シラバスが記載されていることを確認した。
国際機構	◎	従来よりシラバスは和英併記となっている。

2-3 照会事項3 授業方法改善のための取り組み等の実施状況

【検証事項1】授業評価アンケート及び卒業者に対するアンケートの結果を、授業方法の改善のために、どのように活用したか

1) 授業評価アンケート

活用状況 ◎：活用した，○：一部活用した，△：活用検討予定，×：活用しない，—：今年度対象外

部局名	実施状況	活用内容
人文学類	○	授業評価アンケートを着実に実施し昨年度からの課題としてあげられていた授業評価アンケート結果に対する組織的対応の不足について、授業評価アンケート結果の公開と学類教員へのフィードバックが可能となり、前年度と比べて授業評価アンケート結果の授業への活用が進んだと思われ、改善が促進されたと評価している。
法学類	◎	授業評価アンケート結果は、個々の教員に報告され、各教員の責任のもとで次回以降の授業改善に活用していると判断している。
経済学類	◎	アンケート結果は、各教員のアカンサスポータルに集計結果が報告される仕組みとなっており、各教員はそれに基づき、次年度の授業改善に役立てていることから、十分活用されていると判断する。
学校教育学類	◎	各授業担当教員に、授業評価アンケートの結果を自己点検し、今後の授業改善にどのように役立てるかを検討する「リフレクション・ペーパー」への記載に活用した。
地域創造学類	○	大部分の科目で実施しているが、履修者の数や学生の非協力などの要因で実施されていない科目もある。実施した科目のアンケートは、授業担当教員が今後の授業内容の改善の参考にし、それをシラバスに反映する等活用されているとおおよそ評価できる。
国際学類	◎	アンケートによれば、予習・復習時間の項目を除き、授業の理解度、有益性、進度の適切さや内容の水準等あらゆる点において、本学類の提供する授業は、学生の高い評価を受けていると言える。アンケートの結果に基づいて、本学類としてはこれまでの教育方針・手法を当分堅持することが「きわめて適切」とであると判断するに至った。教育という営為に求められる「継続性」「粘着性」という観点からいえば、頻繁に変化させるためではなく、従前実行されている施策の正しさにつき確信を与え、それを継続的に展開するエビデンスを提供したという点で、アンケートは十分活用されている。
数物科学類 数物科学専攻	◎	学類・専攻の科目を対象に、出席状況、目標・ポイントの明示、説明の仕方、授業理解度及び満足度等の質問項目で実施し、その結果をリフレクションペーパーの作成、TAやALAの採用計画策定に活用した。
物質化学類 物質化学専攻	◎	学類・専攻の科目を対象に、出席状況、目標・ポイントの明示、説明の仕方、授業理解度及び満足度等の質問項目で実施した。結果については学類内FD研修会の議題として取り上げ、特にアクティブ・ラーニングを促す授業設計における指針として活用した。
機械工学類 機械科学専攻	○	学類・専攻の科目を対象に、出席状況、目標・ポイントの明示、説明の仕方、授業理解度及び満足度等の質問項目で実施した。それらの結果を通じて学生の理解度や満足度が低い項目を把握し、各教員が次年度の授業改善に活用している。なお、回答が義務化されていない授業評価アンケートなので、回答率は必ずしも高くない。各教員はアンケート結果に振り回されないように気をつけている。

2-3 照会事項3 授業方法改善のための取り組み等の実施状況

部局名	実施状況	活用内容
フロンティア工学類	○	標準の授業評価アンケートを実施し、各教員で検討するよう、学類会議等を利用して依頼した。
電子情報通信学類 (電子情報学類) 電子情報科学専攻	△	授業評価アンケート結果の活用方法に関しては、現在は各教員に任されている。学類としての活用方法については今後検討していく。
地球社会基盤学類 (環境デザイン学類) 環境デザイン学専攻	△	授業評価アンケート結果の活用方法は各教員に任せている。フィードバック方法については今後検討していく。
生命理工学類 (自然システム学類) 自然システム学専攻	△	生命理工学類となってから初めてのアンケートとなることから、いずれもフィードバックすることは出来ていない。今後活用を検討する。
医学類	◎	授業評価アンケートを会議にて結果報告及び授業改善に役立てて欲しい旨依頼した後、データを科目責任者にフィードバックしており、科目責任者は、授業改善のためにアンケートを参考にしている。また、カリキュラム評価委員会にて前期後期に各10科目前後の授業科目について評価を行っているが、授業評価アンケートをカリキュラム評価の指標資料として用いており、授業評価アンケートを授業改善の参考にしているかを確認している。
薬学類・創薬科学類 創薬科学専攻 薬学専攻	◎	各授業担当教員が授業評価アンケート結果を確認し、受講者からの要望があったものについては、要望に対応して行った授業改善も含めて、回答を薬学系 Web サイトにて公表した。
保健学類 保健学専攻 (博士前期・後期課程)	◎	アンケートの結果を各科目担当者に伝え、各自が理解し、改善に取り組んだ。
人間社会環境研究科	○	クォーター毎にアカンサスポータルを通じてアンケートを実施した。授業担当者に結果を報告し、改善を求めた。
新学術創成研究科	○	新学術創成研究科は、入学定員が14名と少なく、1科目当たりの受講者が少ない傾向にある。研究科では、受講者が5名以上の科目についてアンケートを行っているが、今年度は対象となる講義がなく、集計結果の公表は行わなかった。対象となる科目がある場合は、担当教員に公表して意見交換を行い、授業方法の改善に活用する。
医薬保健学総合研究科 (修士課程・医学博士課程)	◎	必修科目において実施した。集計結果を担当教員にフィードバックし、次回開講に向けて授業内容の改善を行った。
先進予防医学研究科 (医学博士課程)	◎	受講者10名以上の授業で実施。集計結果を担当教員にフィードバックし、次回開講に向けて授業内容の改善を行った。
法務研究科	◎	前期・後期とも、授業の最終回に、アンケート用紙を配布し、10分程度の時間を取って、学生に記載させ、学生の代表が大学院に提出する。従って、欠席者を除き、ほぼ100%の回収率である。中間アンケートについては、各教員に対し、授業科目についての学生からのコメントへの返答と対応を求めると同時に、各委員会に対し、学生から寄せられた意見への対応の協議・対応を依頼し、結果を学生に文書で告知している。期末アンケートについては、各教員にアンケート結果を踏まえた報告書を作成してもらい、それをすべて共有した上でFD研修会の議題としている。
教職実践研究科	◎	前期中間、前期終了時、後期中間、後期終了時と、年間4回の授業評価アンケートを実施し、その結果及び学生へのフィードバックについて教務・FD委員会において検討した。アンケート結果のフィードバックを「実践カンファレンスⅠ・Ⅱ」の講義において行うとともに、各教員は個別授業の改善を行った。

2 - 3 照会事項3 授業方法改善のための取組み等の実施状況

部局名	実施状況	活用内容
国際基幹教育院 GS 教育部門	○	・ アカンスポータルを利用しクォーター毎に実施。内容については、別紙のとおり。 ・ 国際基幹教育院 Web サイトに授業改善のためのヒントとともに、アンケート集計結果を公表した。 ・ 授業評価アンケートの自由記述の内容を分類し、その結果を国際基幹教育院 Web サイトに公表した。 ・ 授業担当教員及び国際基幹教育院長以外に、GS 教育、外国語教育及び高等教育開発・支援の系長・部門長等の予め指定された教員にもアンケート結果を開示し、各科目の問題等を系・部門で共有したことで活用できた。
国際基幹教育院 外国語教育部門	◎	各教員が授業評価アンケートの結果を参考とし、授業の改善に努めている。EAP 教育企画部では授業アンケートを分析し、統一シラバスを作成・修正する際に参考にするという方法で活用している。（国際試験教育企画部では、2 月の TOEIC IP テスト時に独自のアンケートを行っているので、シラバス作成・修正時に授業評価アンケートは活用していない。）EAP 教育企画部・国際試験教育企画部では、企画部長が全クラスのアンケート記述内容を確認し、必要と認められた場合には担当教員への聞き取りや、学生への対応の助言を行っている。初習言語科目では、科目によってシラバスが異なるため、各教員が授業アンケートをよく確認し、シラバス作成の際にそのアンケート結果を参考にして活用し、評価方法の見直しや授業改善の機会として欲しい旨、周知した。
国際基幹教育院 高等教育開発・支援部門	○	・ アカンスポータルを利用しクォーター毎に実施。内容については、別紙のとおり。 ・ 国際基幹教育院 Web サイトに授業改善のためのヒントとともに、アンケート集計結果を公表した。 ・ 授業評価アンケートの自由記述の内容を分類し、その結果を国際基幹教育院 Web サイトに公表した。 ・ 授業担当教員及び国際基幹教育院長以外に、GS 教育、外国語教育及び高等教育開発・支援の系長・部門長等の予め指定された教員にもアンケート結果を開示し、各科目の問題等を系・部門で共有したことで活用できた。
国際機構	◎	アンケートの結果は、学期開始時の授業担当者全体会議においてプログラムコーディネーターが各担当者に通知し、必要に応じ担当者間での問題の共有や担当者への改善の要請を行った。アンケート全体のまとめ、および公表については今後の課題とする。

2) 卒業者に対するアンケート

活用状況 ◎：活用した，○：一部活用した，△：活用検討予定，×：活用しない，—：今年度対象外

部局名	実施状況	活用内容
人文学類	◎	新型コロナウイルスにより学位記授与式が中止されたことの影響でアンケート回答者数がかなり少なくなった(23名)ため今回のアンケート結果から正確な判断はできないが、「Q1 幅広い教養や社会的常識を身につけることができた」と「Q10 全体として、金沢大学人文学類で学んだことに満足している」について肯定的評価(そう思う、ややそう思う)の学生の割合が95.7%だったことは評価できることだと思われる。一方、「Q5 プレゼンテーションの能力を磨くことができた」と「Q8 人間や社会の諸問題を、歴史的背景をふまえて把握する能力を身につけることができた」において肯定的評価が7割を下回ったといった反省すべき点が判明できたことは今後の授業改善に有意義に活用できていると評価できる。
法学類	◎	次年度以降のカリキュラム編成等の参考として活用できた。
経済学類	◎	学位記授与式の中止に伴い、回答数はかなり少なく、正確な判断はできないが、卒業者の種々の経済分野ごとの知識については、概ね80%以上が肯定的な評価であったが、一部に低い評価があった。そのような分析結果を踏まえ、次年度の授業の改善の資料として役立てることができた。
学校教育学類	◎	平成29・30年度の卒業者アンケートの「なるためノート」に関する項目を整理・分析したもの及び、令和元年度の卒業者アンケートの結果の報告を、令和元年度学校教育学類FD・カリキュラム委員会活動報告書に掲載した。なお、令和元年度学校教育学類FD・カリキュラム委員会活動報告書は、令和2年5月頃に学類のサイトにおいて学内公開し、今後の授業改善に活用できるようにした。
地域創造学類	○	卒業者全員にアンケートの協力をアカンサスポータル等で呼びかけたが、新型コロナウイルス感染症流行拡大による学位記授与式の中止に伴い、回答数はかなり少なく、活用自体は不十分な結果となった
国際学類	◎	アンケートによれば、在学者の授業アンケートの場合と同様、予習・復習時間の項目を除き、授業の理解度、有益性、進度の適切さや内容の水準等あらゆる点において、本学類の提供する授業は、学生の高い評価を受けていると言えるが、唯一の問題点として、予習・復習乏しさが明らかとなった。一般に教科書の解説→問題演習形式をとらない文系学類の授業の場合、予習や復習と講義の連関は理系学類とは大きく異なるので、予習や復習の教育カリキュラム上での位置づけについては学類全体での議論が必要と考えている。このように今回の分析結果を契機とし、FD研修会の主題として取り上げ、令和2年度中に一つの結論を提示する資料として活用できた。
数物科学類 数物科学専攻	◎	アカンサスポータルを利用した卒業者・修了者学修到達度アンケートを実施し、その結果をリフレクションペーパーの作成、TAやALAの採用計画策定に活用した。
物質化学類 物質化学専攻	◎	アカンサスポータルを利用した卒業者・修了者学修到達度アンケートを実施し、その結果を学類内のFD研修会の議題として取り上げ、課題点の抽出および改善内容に関して議論を行った。
機械工学類 機械科学専攻	○	アカンサスポータルを利用した卒業者・修了者学修到達度アンケートを実施した。アンケート結果を各教員に共有し、各教員がその結

2-3 照会事項3 授業方法改善のための取り組み等の実施状況

部局名	実施状況	活用内容
		果を分析し、担当科目の理解度を向上させるべくシラバスの改良に努めている。
フロンティア工学類	—	まだ卒業者がいません。一期生の卒業に合わせて実施を検討する。
電子情報通信学類 (電子情報学類) 電子情報科学専攻	△	現在は、卒業生アンケート結果の具体的な活用は行われていない。今後、活用方法について学類会議等で検討していく。
地球社会基盤学類 (環境デザイン学類) 環境デザイン学専攻	△	環境デザイン学類では卒業生アンケートの結果から概ね問題ないと評価したため、具体的な活用は行っていない。この結果を地球社会基盤学類としてどう活用していくかは、一期生の卒業にあわせて今後検討する。
生命理工学類 (自然システム学類) 自然システム学専攻	△	学類改組により卒業者がいないためフィードバックは出来ていない。今後、活用を検討する。
医学類	◎	卒業アンケートをカリキュラム改善のための資料として用いている。
薬学類・創薬科学類 創薬科学専攻 薬学専攻	○	学位記授与式の中止に伴い、急遽 Web アンケートに変更したため回答者数が少なく、この結果からは正確な判断はできないが、学類、大学院の各教務委員長及び就職担当教員と結果を共有し、今後の参考とすることとした。
保健学類 保健学専攻 (博士前期・後期課程)	△	今後、活用を検討する。
人間社会環境研究科	◎	例年、次年度 FD 研修会を通じて、改善案を検討している。平成 30 年度アンケート結果に関しては、GS 科目に関して不満が見られたので、FD 研修会で改善案を検討した。令和元年度のアンケート結果も、令和 2 年度 FD 研修会にて改善案を検討する予定である。
新学術創成研究科	○	新学術創成研究科は、令和 2 年 3 月に初めての修了者を輩出し、修了者に対するアンケートを実施した。また、今後の授業方法の改善に資するために、集計結果を融合科学共同専攻会議にて担当教員に公表した。
医薬保健学総合研究科 (修士課程・医学博士課程)	◎	アカンサスポータルにて修了者アンケート（学修成果自己評価アンケート）を実施した。在学中の研究教育活動に概ね満足したとする回答が多かった。集計結果を指導教員にフィードバックし、今後の学生指導に生かすこととした。
先進予防医学研究科 (医学博士課程)	◎	アカンサスポータルにて修了者アンケート（学修成果自己評価アンケート）を実施した。在学中の研究教育活動に概ね満足したとする回答が多かった。集計結果を指導教員にフィードバックし、今後の学生指導に生かすこととした。
法務研究科	◎	修了者アンケート（学習成果自己評価アンケート）を実施した。修了者の数が少なく、かつ、回答は良好であったため、特に対応の必要性がなかった。 なお、アンケート以外に、司法試験の勉強中の修了者に対しては、SA として在学者の学習を援助する代わりに自習室や図書室の利用を認めており、在学中のアドバイス教員が引き続き定期的に面談を行って状況を把握し、不満があれば情報を共有し改善を図っている。
教職実践研究科	◎	第 2 期修了生の認証評価に係る調査（修了後の活動等）を 2020 年 3 月に実施した。本アンケートの結果について、2020 年 6 月の教務・FD 委員会にて教員間で共有し、今後の研究科運営及び個別の授業改善の必要性について議論した。

部局名	実施状況	活用内容
国際機構	一△	実施・活用も含めて検討中。

【検証事項2】検証事項1の授業評価アンケート及び令和元年度卒業者に対するアンケートといった各種アンケートの集計結果等を踏まえ、令和2年度に行われる教育方法の改善など教員の教育能力の向上のための組織的取組の計画

部局名	組織的取組の計画
人文学類	ホームページや学類会議等の機会を通じて教員、該当するコースにフィードバックして改善を促す予定である。
法学類	高評価を得ていることから、現在遂行中の法務研究科との連携強化等の着実な遂行を図る。
経済学類	授業アンケート及び卒業アンケートから改善点を洗い出し、FD研修会等で教育の質を挙げる努力を継続していく。
学校教育学類	令和元年度の卒業者アンケートは、新型コロナウイルス感染症感染防止のために卒業式が中止となったことから、アカンサスポータルなどで回答を強く呼びかけたものの、例年を大きく下回る回収率に留まった。そのため、本アンケート結果の解釈には慎重を要する必要があるが、学類の学修成果に基づく学習状況についての自己評価において全ての項目で十分に達成している、ある程度達成していると回答した者が85パーセント以上であったことから、教員養成という本学類のミッションを達成できたのではないかと考えられた。ただし、なるためノートについて、内容や指導教員の指導への評価が高いにもかかわらず、積極的に取り組んだ学生が少なかったことや、教育現場に学生が実際に足を運ぶ機会を多く設定した方が良いという意見が複数の学生からあったことから、次年度は、本年度実施した学校インターンシップ試行を踏まえた学校インターンシップの本格実施や、なるためノートの学生アンケートを踏まえたなるためノートを用いた指導のさらなる見直しなどの実施を検討する必要がある。
地域創造学類	教員の教育力向上のためには2～3年スパンで検討する事項ではあるが、まずは、FD活動を展開する等、考えられる限り多面的に課題に取り組む。
国際学類	本学類の提供する授業に関し理解度、有益性、進度の適切さや内容の水準等あらゆる点において学生が高い評価示したことは、本学類教員の高い教育能力のエビデンスである。一方、予習・復習について、極めて評価が低いアンケート結果が示されたことは、学生の側の意識のみならず、教員の教育観の中で、この側面において、明瞭な価値づけや位置づけが確立されていないことを示している。これは従来からの文系科目の授業形態から見てやむを得ない側面もあるが、教育相互の議論や情報交換を通じて意識改革を促進していく必要性は感じる。そのため、学生に対する啓発と合わせて、「予習・復習の実質化」として、研修会をはじめとする令和2年度の本学類FD活動の主要な柱とする方針としている。
数物科学類 数物科学専攻	授業評価アンケートおよび卒業者・修了者アンケート結果から、学類の重要な基礎的科目の理解度に対する自己評価の改善がさらに必要と考えられたので、それらの科目に対するTAおよびALAの採用計画策定に取り入れるとともに、学生の基礎力向上のための教育方法の検討を行っている。
物質化学類 物質化学専攻	授業評価アンケート結果について、理工学域Webサイトにて公表している。 授業評価アンケートに対する教員の対応策の文書化については、各教員

2-3 照会事項3 授業方法改善のための取組み等の実施状況

部局名	組織的取組の計画
	にリフレクションペーパーの作成及び保管を義務付けている。 これらの内容を元に、学類内において毎年 FD 研修会を開催し、アンケート結果を踏まえた教育方法の改善について議論している。
機械工学類 機械科学専攻	授業評価アンケート結果について、理工学域 Web サイトにて公表している。 授業評価アンケートに対する教員の対応策の文書化については、各教員にリフレクションペーパーの作成及び保管を義務付けている。 また、アンケート集計結果を学類会議で紹介し、教育方法の改善など教員の教育能力の向上に向けた話題提供を実施していく。更に各種アンケート結果を大学院改組にも活用し、これまでに培ってきた各教員の教育能力が十分に発揮できるカリキュラムの構築に貢献する。
フロンティア工学類	アンケートの回収率や実施方法に関して学類内の意見を求めた。授業時間内に回答時間を設けることについては、授業時間が削られるために反対する意見もあり、今後実施方法を含めた検討が必要と思われるので、FD 委員を中心に学類会議等を利用して対策を検討する。
電子情報通信学類 (電子情報学類) 電子情報科学専攻	授業評価アンケート結果の活用方法に関しては、今年度、学類内で検討を進める。また、3 学類 FD 研修会での議題として取り上げることも検討する。
地球社会基盤学類 (環境デザイン学類) 環境デザイン学専攻	それぞれの研究室の教員に依頼し、メールにより令和元年度 3 月末まで、卒業者・修了者に対してアンケート調査を実施した。1988 年～2020 年卒業あるいは修了者から、49 名の回答が得られた。回答者のなかには、自治体やコンサルタントに努める方が 60%を占めており、修士課程の修了者は 47%、学部卒は 41%を占めている。講義に関して、66%の回答者から達成できたという回答があり、実験・演習に関して、60%の回答者が達成できたと回答した。講義や演習などは仕事上で役に立った回答者は 74%を占めている。概ね良い結果であった。改善の要望として、理論知識だけではなく、将来の仕事選択のために、志望の分野に関する社会の知識をもっと教育に入れるべきという意見が多かった。今後、シラバス点検などの際に、基礎力養成の教育内容に合わせて社会知識の内容の取り入れなど、講義の内容を検討する材料となると思われる。
生命理工学類 (自然システム学類) 自然システム学専攻	学類改組したばかりのため、今後アンケートが集まったり、卒業者が出るなどしてから、組織的な取組の計画を行いたい。既存の学類や専攻については改組によってバラバラとなってしまったため組織的な取組は出来ないため、各コース単位での取り組みに任せる。
医学類	FD 講習会を令和 2 年度も継続して実施するが、アクティブ・ラーニングの向上、教育方法の改善を図るため、全教員に対して 1 回以上の参加を義務付けることを検討している。また、年 3 回程度のカリキュラム評価委員会を実施し、委員会にてカリキュラム評価を行い、その結果を各科目責任者にフィードバックするだけでなく、科目責任者に評価結果に対する意見も聴取して、良いカリキュラムとなるように取り組みを行う。
薬学類・創薬科学類 創薬科学専攻 薬学専攻	(薬学類・創薬科学類) 平成 30 年度から導入した新 AO 入試による研究志向の優秀な入学者に対し、令和元年に引き続き効果的な教育を推進するとともに、その教育効果がその他の学生にも波及するよう、ケーススタディを重ねる。 (薬学専攻・創薬科学専攻) 薬学専攻・創薬科学専攻においても、こうした学生を中心とする研究意欲・能力の高い学生が進学し、さらに効果的に能力を伸ばせるよう、カリキュラムや教育方法の改善について検討を行う。
保健学類 保健学専攻 (博士前期・)	授業評価アンケートの回答率向上のための対策が必要である。ただし、COVID-19 感染症による社会情勢の影響もあり、アンケート回答協力も十分にいきわたらなかった可能性は高く、低い回答率に基づく結果の分析は

2-3 照会事項3 授業方法改善のための取組み等の実施状況

部局名	組織的取組の計画
後期課程)	難しい。代替方法（ミニッツペーパーなど）により、学生の反応や理解度の確認に、さらに努める必要がある。学生個々への対応・学習ニーズの把握に努め、国家試験合格率向上を目指していく。
人間社会環境研究科	授業科目等に問題があるという回答がなかったため、授業方法の改善等は行わなかった。ただし、GS科目については授業のレベル（専門性及び英語能力等）をどう設定するか、という課題が発見されたため、カリキュラムの見直しを検討することとした。
新学術創成研究科	授業評価アンケート及び令和元年度修了者に対するアンケートの分析結果から、令和2年度のFDの課題を設定し、FD研修会の実施を通して授業内容や方法についての検討を行い、教員の教育能力の向上に向けた対応を行うこととした。
医薬保健学総合研究科 (修士課程・医学博士課程)	昨年に引き続き、シラバスの記載内容の改善を図る。また、FD講習会を継続して実施し、アクティブ・ラーニングの向上、教育方法の改善を図る。
先進予防医学研究科 (医学博士課程)	昨年に引き続き、シラバスの記載内容の改善を図る。また、FD講習会を継続して実施し、アクティブ・ラーニングの向上、教育方法の改善を図る。
法務研究科	授業評価アンケートの結果を、全ての専任教員に配布し、教員はアンケート結果に対する感想等を書面でFD委員会に提出する。提出された書面も、全ての専任教員に配布し、FD研修会の資料として共有する。 FD研修会で話し合った結果、次のようなことが合意された。 ・複数教員で担当する科目について、答えにくいという指摘が学生から寄せられたため、教員ごとに答えられるように複数枚のアンケート用紙を配付することとした。これにより、より正確に各教員の授業への評価が可視化されることになる。 ・「標準終了年限での修了率」の公表が求められ、原級留置者が多い状況に対して、厳しい目が向けられ得るものの、必要な能力をつけていない者を進級・修了させることは、司法試験合格率を下げることにもつながるため、避けるべきであるとの結論に達した。
教職実践研究科	「実践研究とは何か」をテーマに、2020年度中に3回のFD研修会を開催する予定である。研修会はラウンドテーブル方式で行い、学生や外部講師の参加等も予定している。
国際機構	アンケート結果は上述のように各担当教員に伝えられ、重要な問題点については学期開始時の授業担当者全体会議において討議し改善を図る。また必要ならば研修会を実施し、担当教員の技術および意識の向上を図る。(令和元年度の研修会はそのような問題意識の下計画された)

【検証事項3】教員相互の授業参観・授業評価

実施状況 ◎：実施した，○：一部実施した，△：実施検討中，×：実施しない，－：今年度対象外

部局名	実施状況	◎及び○の場合は、活動内容及び達成状況、 ×の場合は、実施しなかった理由、実施に向けた目標及び達成時期
人文学類	◎	大学教育再生加速プログラムのパイロット授業に人文学類より選定された授業から2科目を対象に公開授業を実施した。見学者からのコメントと授業担当者による応答を集約し、その結果を学類教員で共有して、今後の授業方法の改善に役立てるように努めた。
法学類	◎	期間を定めずいつでも相互に参観できる制度になっている。但し、どれくらいの頻度で実際に参観しているのかを組織的には把握しておらず、確立した評価方法や評価結果を伝える制度となるまでには至っていない。

2-3 照会事項3 授業方法改善のための取り組み等の実施状況

部局名	実施状況	◎及び○の場合は、活動内容及び達成状況、 ×の場合は、実施しなかった理由、実施に向けた目標及び達成時期
経済学類	○	非常勤講師によるオムニバス形式の授業は担当教員が同席している。しかし、学内教員相互による授業参観・授業評価を行うまでには至っていない。
学校教育学類	◎	令和2年1月28日に、美術教育専修の「デザイン・工作」（授業担当者：池上貴之准教授）を対象に研究授業および授業整理会を行い、計11名の参加があった。令和元年度学校教育学類FD・カリキュラム委員会活動報告書に詳細を記載し、各教員が自身の授業改善に役立てることができるよう手立てを講じた。
地域創造学類	○	地域創造学Ⅰ～Ⅳの一部の授業回にコーディネーター教員が参観し、内容を評価・吟味して次年度の授業計画に反映させた。
国際学類	◎	アクティブ・ラーニング型授業を採用した石黒盛久教員担当「ヨーロッパ歴史特論A2」（学校教育学類「ヨーロッパ圏理解A」）の最終発表プレゼンの機会を利用し、村井学域長をはじめ関係学類教員に授業見学を依頼し、講評をいただいた。第三者の批評に堪える発表内容にするという点で、学生たちにとっても発表に対する大きなインセンティブとなったようである。
数物科学類 数物科学専攻	○	集中講義および特別講義では教員相互の授業参観ができる体制になっている。その他の講義については実施に関する検討を行っているが結論は出ていない。
物質化学類 物質化学専攻	△	2021年1月までに授業参観・評価の実施検討を継続する。
機械工学類 機械科学専攻	△	教育方法改善委員が担当する科目で相互に授業参観を実施する予定で進めていたが日程が合わなかった。来年度に教育方法改善委員の科目を中心に授業評価アンケートで評価の高い科目で授業参観の実施を検討する。
フロンティア工学類	△	一期生が2年次で、学類の専門科目は今年度以降に実施されるため、講義が一巡した段階での実施を検討する。
電子情報通信学類 （電子情報学類） 電子情報科学専攻	△	新カリキュラムが進行中であり、次年度の前期中に、新カリキュラムで実施された授業から対象となる授業を検討していく。
地球社会基盤学類 （環境デザイン学類） 環境デザイン学専攻	○	実態として、一部の演習や講義には、担当教員の間に授業のやりかたをお互いに参考することがあった。
生命理工学類 （自然システム学類） 自然システム学専攻	△	コースにより事情が異なるため、授業録画配信システムの利用も含め、引き続き検討する。生命理工学類の専門科目の講義は2019年度より開始したので、来年度や再来年度に3年次・4年次の講義が出そろった段階で、どのように実施するかを検討を行い、学類内での調整を行う。
医学類	○	・新任教員が他科目の授業を見学し、自分の講義の改善に役立てている。 ・一部の科目において実施した。授業内の取り組みをFD研修で紹介し、医学系や保健系教員や国際基幹教育院の教員同士でディスカッションし、評価および共有を行った。 ・カリキュラム評価委員会を開催し、講義内容、シラバス、レポート課題、定期試験問題及び授業評価アンケートを確認し、授業の評価を行い、評価結果を各科目責任者にフィードバックしている。
薬学類・創薬科学類 創薬科学専攻、薬学専攻	△	部局内で取り上げたことはあるが、すでに他の多くの事項について実施しており、現時点では授業録画を活用した評価等について検討中である。

2-3 照会事項3 授業方法改善のための取り組み等の実施状況

部局名	実施状況	◎及び○の場合は、活動内容及び達成状況、 ×の場合は、実施しなかった理由、実施に向けた目標及び達成時期
保健学類 保健学専攻 (博士前期・後期課程)	◎	1 年次 Q2「初学者ゼミⅡ」において、高大接続プログラム・講義を 5 専攻混合にて行った。実施に向けては高大接続 WG による講習会有り、初学者ゼミⅡの担当教員の自主的参加があった。実際の高大接続プログラム・講義の際は、担当教員以外の見学があった。
人間社会環境研究科	△	アンケートでは授業方法に問題があるという回答も無く、少人数の授業でもあるため、授業参観・授業評価は実施しなかった。アンケート結果を見て、今後の実施を検討する。
新学術創成研究科	◎	研究科独自開講科目である「異分野『超』体験セッション」において、担当教員が一堂に会し、学生に向けて行った研究紹介を視聴することで、相互に授業参観を行った。
医薬保健学総合研究科 (修士課程・医学博士課程)	○	「Up-to-date セミナー」において、他の教員の授業を聴講し、相互理解を深めた。
先進予防医学研究科 (医学博士課程)	◎	千葉大学、長崎大学及び本学の 3 大学の教員の連携を要する授業科目については、内容に係る綿密な打合せを行った上、実施した。終了後、3 大学の会議において、参観教員等からの意見に基づき、次回開講に向けた検討を行った。
法務研究科	◎	前期・後期とも専任教員はいつでも授業参観ができる。前期・後期それぞれ、少なくとも 2 科目について授業参観報告書を作成して、FD 委員会に提出する。
教職実践研究科	◎	全ての授業が複数教員によるものであるため、学生の省察シート（振り返りシート）なども参考にして、必要に応じて、教員間で日常的に意見交換を行った。
国際基幹教育院 GS 教育部門	○	全 GS 科目において授業開催の情報をポータル（google spreadsheet）で共有し、相互の授業見学を促進した。見学後は簡単な報告書を作成し、共有するものとした。また、GS 教育系の情報交換会等において、アクティブ・ラーニング型授業の実施方法、英語での授業の実施方式や授業内容について情報交換、意見交換を行った。年間で数件の授業見学を実施したが、上述の手順に則り報告書を作成したものが 1 件だけであったため、実施状況は「○」とした。
国際基幹教育院 外国語教育部門	◎	EAP 科目では、EAP 教育企画部の部長と EAPⅠ～Ⅳの各コースヘッドの授業を常時参観可とし、3 名の参観者があった。また、5 月に EAP 教育企画部全員が相互授業参観を行った。TOEIC 準備科目では、7 月に授業参観を行い、3 名が参観した。
国際基幹教育院 高等教育開発・支援部門	◎	オムニバス授業において相互授業参観を行なった。
総合メディア基盤 センター	◎	情報処理基礎の総合メディア基盤センター部分で、総合メディア基盤センター内の教員、および後半の学類担当者の授業参観を可とした。少なくとも 25 クラスについて各 3 回の担当のうち 7 クラスの各 3 回について授業参観が行われた。
国際機構	◎	FD 強化週間（令和元年 12 月 9 日～13 日）において実施した。全体で 11 件の見学報告メールが FD 担当者に寄せられた。

2-4 照会事項4 成績評価基準等の作成・検証状況

【検証事項1】令和元年度の実施状況

1) 成績評価基準等の作成状況

実施状況 ◎：実施した，○：一部実施した，△：実施検討中，×：実施しない，—：今年度対象外

部局名	実施状況	◎、○及び※の場合は実施内容、 ×の場合は実施しなかった理由、作成に向けた目標 及び達成時期
人文学類	◎	人文学類各コースより選定された計9科目を対象にルーブリックの作成をおこない、シラバスに記入した。
法学類	◎	全科目につき採点の要点や試験の講評等を作成している。 また、一部科目でルーブリックを作成している。
経済学類	◎	シラバス記載の時に成績評価方法と割合も記入することになっている。シラバス作成時に該当箇所のチェックと修正の必要な場合には指示をした。また、ルーブリックも一部の科目で作成しており、さらにシラバスに掲載している。
学校教育学類	◎	FD・カリキュラム委員会において、カリキュラムマップなどを踏まえ、成績評価基準の記載方法が記載されたシラバス点検マニュアルを作成した。
地域創造学類	○	シラバスに成績評価基準が記載されているか、各教員の主要科目で一部実施した。また、ルーブリックも一部の科目で作成しており、シラバスに掲載しているものもある。
国際学類	◎	一部の科目についてはルーブリック作成を試みるとともに、その他の科目についても、シラバス記載の成績評価基準の具体化、可視化に留意している。ルーブリック作成授業については、今後随時その割合が高まるよう教務・学生生活委員会が主体となり、指導・要請をしているところである。
数物科学類 数物科学専攻	○	各コースの教務委員と協力をしてルーブリックに関すること理解を深めてもらうようにし、各教員がそれぞれ1科目のルーブリックを作成した。
物質化学類 物質化学専攻	○	・応用化学コースではJABEE認定に見合うだけの基準を標準化して、実験・実習以外の科目については出席点を成績評価に含めず、60点以上を合格としている。 ・専門科目担当教員全員がそれぞれ1科目のルーブリックを作成した。
機械工学類 機械科学専攻	○	一部の科目でルーブリックを作成し、詳細な成績評価基準を記している。また、ほとんど全ての科目のシラバスで成績評価の基準は明記されている。
フロンティア工学類	◎	教育方法改善委員がシラバスの記載内容を点検した。 全ての科目に成績評価方法と割合が記載されている。 4%の科目にルーブリックが記載されている。
電子情報通信学類 (電子情報学類) 電子情報科学専攻	◎	教務委員と協力し、一部科目においてシラバスへのルーブリック掲載と確認を行った。
地球社会基盤学類 (環境デザイン学類) 環境デザイン学専攻	○	一部科目において、ルーブリックに詳細な成績評価基準を記載しました。
生命理工学類 (自然システム学類) 自然システム学専攻	○	教務委員の指導の下、ルーブリック作成例の周知が行われた。 また一部の科目についてはルーブリックの作成と教務委員によるチェックが行われた。

部局名	実施状況	◎、○及び※の場合は実施内容、 ×の場合は実施しなかった理由、作成に向けた目標 及び達成時期
医学類	◎	一部の授業科目ではシラバスにて成績評価基準を公表している。また、医学類全体の単位修得条件、進級要件、卒業判定等の規程については「医学類履修・学生生活の手引」に記載して学生へ配付している。
薬学類・創薬科学類 創薬科学専攻、薬学専攻	○	シラバスに詳細な成績評価の方法、割合を記載した。また、卒業研究を一連の研究活動として体系的に評価するルーブリックを作成し、公開に向けて定期的な見直しを行っている。
保健学類 保健学専攻 (博士前期・後期課程)	○	一部の科目について、シラバスにルーブリックを記載した。
人間社会環境研究科	◎	研究科全体として、成績評価基準は作成しなかった。シラバスに適正な成績評価基準が記載されるよう、各専攻・各コースにおいてシラバスチェックを行った。したがって、各授業のシラバスに、各専攻・各コースのAP・カリキュラムに沿った成績評価基準が記載されている。
新学術創成研究科	◎	「金沢大学大学院新学術創成研究科成績評価に関するガイドライン」を作成した。
医薬保健学総合研究科 (修士課程・医学博士課程)	◎	各授業科目の成績評価基準等については、シラバスで公表。単位修得条件、修了要件等は、手引き(冊子)に掲載し、学生に配付した。ルーブリックは未実施。成績評価基準はシラバスでのみ公表。
先進予防医学研究科 (医学博士課程)	◎	各授業科目の成績評価基準等については、シラバスで公表。単位修得条件、修了要件等は、手引き(冊子)に掲載し、学生に配付した。ルーブリックは未実施。成績評価基準はシラバスでのみ公表。
法務研究科	◎	厳格な成績評価基準が定められている。
教職実践研究科	◎	ルーブリックなどの成績評価基準は作成していないが、各授業担当者においてシラバスに詳細な成績評価基準を記載した。
国際基幹教育院 GS 教育部門	◎	厳格・公正な成績評価記述の策定方針に従い、各科目について成績評価の基準となるルーブリックを作成した。作成したルーブリックは web シラバスに明記した。また、総合教育部の発足に伴い、全科目について素点による成績評価を実施した。
国際基幹教育院 外国語教育部門	◎	GS 言語科目では、ルーブリックに詳細な成績評価基準を記載し、EAP 科目では、加えて試験の方法・採点表も教員マニュアルに記載した。初習言語科目では、言語ごとに実施した。 (例：母語話者教員担当のオーラルクラスで、発音、内容、流暢さなどの項目ごとの詳細な基準を示すなど)
国際基幹教育院 高等教育開発・支援部門	◎	成績評価基準をシラバスに記載した。オムニバス形式授業の一部についてはレポート採点に関するルーブリックを開示している。
国際機構	◎	従来よりシラバスに成績評価基準を明記している。ルーブリック化は一部科目で実施した。

2) 成績評価基準又は成績評価方法の検証

実施状況 ◎：実施した，○：一部実施した，△：実施予定，×：実施しない，—：今年度対象外

部局名	実施状況	◎、○及び※の場合は、実施状況・内容、 ×の場合は実施しなかった理由、作成に向けた目標 及び達成時期
人文学類	◎	ループリックを作成した9科目については、人文学類FD委員長がシラバス上で内容を確認した。
法学類	◎	全科目につき作成した採点の要点や試験の講評等を公開し検証している。
経済学類	○	学類FD委員会で、シラバスの成績評価項目の記載をチェックし、修正が必要な場合には指示をした。
学校教育学類	◎	FD・カリキュラム委員会が作成したシラバス点検マニュアルに基づき、学校教育学類に設けられた11専修の教員同士でのピアレビューにより点検をした。
地域創造学類	○	FD委員会で、シラバスに成績評価基準が記載されているか、各教員の主要科目で一部実施した。
国際学類	◎	教務・学生生活委員会が主幹となり、シラバス記載の成績評価基準を精査し、あまりに漠然としたものについては各教員に修正を提案した。
数物科学類 数物科学専攻	◎	ループリックを作成した科目についてはその妥当性を検証した。それ以外の科目についてはシラバスの公開により、教員相互の検証が実質的に行われている。
物質化学類 物質化学専攻	○	・主要科目については成績評価エビデンスとして答案のコピーを収集し、試験実施の厳密化を推進している。 ・専門科目から4科目をパイロット授業に選定し、授業カタログの作成・公開を通じて成績評価の基準や分布、問題点を検証した。
機械工学類 機械科学専攻	○	ループリックが作成された科目については検証を行った。
フロンティア工学類	△	一期生が2年次で、学類の専門科目は今年度以降に実施されるため、今後検討する。
電子情報通信学類 (電子情報学類) 電子情報科学専攻	△	ループリックの作成により対応を進めていく。
地球社会基盤学類 (環境デザイン学類) 環境デザイン学専攻	△	地球社会基盤学類の専門科目初年度であり成績評価の検証は、2年目以降対応を進める。
生命理工学類 (自然システム学類) 自然システム学専攻	△	生命理工学類の専門科目の講義は2019年度より開始したため初の成績評価年度であった。そのため成績評価基準や方法の検討は行わなかった、今年度の成績評価を引き継ぎつつ、必要な検証は来年度以降行う。
医学類	○	「科目別カリキュラム評価チェックシート」を使用して、カリキュラム評価委員会委員による成績評価についてのチェックを行った。
薬学類・創薬科学類 創薬科学専攻、薬学専攻	○	シラバスに目標達成度を評価するための指標が適切に設定されているかを確認し、学修成果の獲得に係る判断基準を示した。
保健学類 保健学専攻 (博士前期・後期課程)	—	国家試験受験資格を得るための達成すべき基準（到達目標）があり、それに従った成績評価基準となっていることを確認済みであるため、検証は行わなかった。

2 - 4 照会事項 4 成績評価基準等の作成・検証状況

部局名	実施状況	◎、○及び※の場合は、実施状況・内容、 ×の場合は実施しなかった理由、作成に向けた目標 及び達成時期
人間社会環境研究科	△	現況、特段成績評価に問題があるとは報告されていないので、令和元年度は、評価基準・評価方法の検証は行わなかった。令和2年度にシラバスチェックやアンケート結果を踏まえ、一度、検証を行う。
新学術創成研究科	○	融合科学共同専攻のFD研修会において、「異分野『超』体験実践」の成績評価方法及び成績評価基準の検証を行った。
医薬保健学総合研究科 (修士課程・医学博士課程)	○	各単位認定教員が、担当授業科目の複数の担当教員とともに検証を行った。
先進予防医学研究科 (医学博士課程)	○	初開講の授業科目について、3大学の担当教員により検証を行った。
法務研究科	◎	各教員は、成績報告の際、定期試験の解答例、採点基準、成績分布を提出する。これらは学生に開示される。
教職実践研究科	◎	専門研究Ⅰ・Ⅱなど、主として指導する学生を決めて指導に当たっている授業科目については、各指導教員が付けた成績の妥当性を検証するため、再評価を全教員で行った。そうでない授業科目については、各講義の担当教員（複数）で、評価の客観性・妥当性を確認し、評価方法を検証するとともに、客観性のある評価となるよう活かした。
国際基幹教育院 GS 教育部門	◎	成績評価結果の分布について系・部門会議およびGS教育系情報交換会などで議論を行った。分布の分類分けを行うとともに、GS部門としての規範的な分布の在り方を策定すべく検討を進めた。
国際基幹教育院 外国語教育部門	◎	TOEIC 準備科目では、共通テストの成績分析や経年分析等を行った。EAP 科目では、評価基準と成績評価分布の見直しを行った。初習言語科目では、学生アンケートや上級クラスの履修状況、研修・留学等、総合的な観点から成績基準の妥当性を検証した。
国際基幹教育院 高等教育開発・支援部門	◎	成績分布を部門において検証した。
国際機構	◎	成績評価基準のルーブリック化に向けて、これまで成績評価法についての検証を行った。

2-5 照会事項5 FD研修会の実施状況

2-5 照会事項5 FD研修会の実施状況

FD 研修会のうち、大学教育再生加速プログラム（AP）事業又はスーパーグローバル大学創成支援（SGU）事業に関係する内容が含まれる場合は、各欄に○を記載する。

部局名	実施回数	名称	開催日	概要	参加人数 (概数)	備考	AP	SGU
人文学類	1	人文学類 FD 研修会	1 月 15 日	授業の英語化をおこなっている教員の実践報告	人文学類長ほか 37 名		○	○
法学類	2	FD 研修会	6 月 11 日	学類 FD の改善に向けた考察	20 名			
		科目打合会	3 月 4 日	初年次科目担当者による各担当部分の相互理解	12 名			
経済学類	2	第 1 回 FD 研修会	8 月 1 日	「オンライン学習を用いた GS 言語科目の PDCA サイクル」をテーマに 1 部：成績チェック・付属教材利用方法 2 部：GS 言語のオンライン学習を振り返ってを実施し、活発な討論が行われた。	佐藤学類長， FD 委員 ほか 19 名		○	○
		第 2 回 FD 研修会	12 月 5 日	「今どきの学生をやる気にする方法とは？」をテーマに外部講師によるメンタルトレーニングの豊富な経験から講演と実技指導をご教示頂いた。	佐藤学類長， FD 委員 ほか 11 名		○	
学校教育学類	3	令和元年度学校教育学類第 1 回 FD 研修会	8 月 21 日	講演：「AI の進化と Society 5.0 時代に求められる人材教育」（講師：大阪大学 栄藤稔氏）	人間社会学域長，学校教育学類長， FD・カリキュラム委員ほか 24 名	学校教育学類・教職実践研究科・附属学校園研究推進委員会との共催。教職実践研究科，附属学校園教員を含めた総参加者は 121 名		
		令和元年度学校教育学類第 2 回 FD 研修会	1 月 9 日	「今後の教員養成における大学授業を考える (1)」話題提供：「教育現場に向いて行う実践講義型授業の提案」（講師：学校教育学類 吉川一義教授，吉村優子准教授）	学校教育学類長， FD・カリキュラム委員ほか 41 名			
		令和元年度学校教育学類第 3 回 FD 研修会	2 月 13 日	「今後の教員養成における大学授業を考える (2)」話題提供：「スウェーデン教育研修」（講師：学校教育学類 武居渡教	学校教育学類長， FD・カ			

2-5 照会事項5 FD研修会の実施状況

部局名	実施回数	名称	開催日	概要	参加人数 (概数)	備考	AP	SG U
				授), 「教科教育法と教科内容の共同による指導」(講師: 学校教育学類 理科教育専修), 「学校教育学類教員と附属学校園教員による学校インターンシッププログラムの共同開発」(講師: 学校教育学類 小林宏明教授)	リキュラム委員ほか 30名			
地域創造学類	5	第1回地域創造学類懇談会	10月29日	国立大学改革方針案を受け、観光学・文化継承コースの教育目標について意見交換した。	11名			
		第2回地域創造学類懇談会	10月30日	新学類の提案に対して、学類として取り得る3つの方向案について意見交換した	10名			
		第3回地域創造学類懇談会	10月31日	新観光学類構想案をめぐり、地域創造学類としてどのような方針で臨むかについて、学類教員一人ひとりが意見を述べ、学類改革の方向性について意見交換した。	11名			
		第4回地域創造学類懇談会	11月1日	地域創造学類の改組を前提として、教育目標、教育内容、カリキュラム改革案について再点検を行った。	8名			
		第5回地域創造学類懇談会	11月5日	人社会学域における地域創造学類の位置と役割について再検討するとともに、学類改革の必要性を確認した。	10名			
国際学類	3	第1回FD研修会	7月30日	国際学類におけるクォーター制導入の実質化について	志村学類長 古畑教務・学生生活委員長他 14名			
		第2回FD研修会	1月7日	国際学類における情報処理教育の展望	志村学類長 古畑教務・学生生活委員長他 10名			
		第3回FD研修会	3月10日	ポートフォリオ(学務情報サービス)の使い方説明会	志村学類長 古畑教務・学生生活委員長他 17名			
数物科学類 数物科学専攻	1	AIMaP集会: 令和の時代における数理科学の社会的役割	11月21日, 22日	数理モデリング・データサイエンス教育に関して、産業界に必要な数理工学的人材を育成するための方策および基礎レベルのリカレント教育を行うための	54名 (うち学外6名)	文部科学省科学技術試験研究委託事業		

2-5 照会事項5 FD研修会の実施状況

部局名	実施回数	名称	開催日	概要	参加人数 (概数)	備考	AP	SG U
				取り組みについて、産業界や政府機関との意見交換を行った。		の助成を受けて実施。		
物質化学類 物質化学専攻	1	物質化学類応用化学コース FD 研修会		講義の進め方とその工夫と問題点について講演等	18 名			
3 学類（機械工学・フロンティア工学・電子情報通信学） 機械科学専攻 電子情報科学専攻	1	合同FD研修会	3 月 16 日～ 31 日	機械工学類，電子情報通信学類，フロンティア工学類の 3 学類合同で FD 研修会を開催した。 新型コロナウイルスの感染拡大を受け，講義形式の研修会開催を断念し，WebClass を用いたオンライン学習形式で実施した。内容としては，ビデオ教材の作成方法，WebClass を用いた資料や情報の個別配布方法など，オンライン学習に役立つ情報を中心とした。	70 名			
地球社会基盤学類 （環境デザイン学類） 環境デザイン学専	1	学類 FD シンポジウム	3 月 2 日	国際基幹教育院にご協力をお願いし，ファシリテータの役割やアクティブ・ラーニングの技法に関する内容など	海外出張や休職者以外，学類の全教員が出席した			
自然システム学類 （生命理工学類） 自然システム学専攻	0	—	—	—	—	—	—	—
医学類	19	統合臨床試験問題作成説明会	4 月 25 日	統合臨床試験問題作成のための説明会	教育委員 3 名 問題作成委員 30 名			
		CBT 問題作成ブラッシュアップ	4 月 11 日 4 月 12 日	共用試験 CBT 問題のブラッシュアップ	問題作成委員 21 名			
		共用試験医学系 OSCE 全国説明会	4 月 24 日	2019 年度 OSCE 実施要項・実施状況について他	教育委員 1 名 ほか 1 名			
		OSCE 評価者認定講習会	8 月 4 日 12 月 1 日	OSCE 評価者を認定するための講習会	OSCE 担当教員 41 名			
		医学・歯学教育指導者のためのワークショップ	7 月 24 日	卒前・卒後の一貫した医師養成について	教育委員長 1 名			
		基礎系チューター説明会	10 月 8 日 10 月 29 日	チュートリアル教育を行うための研修会	チューター教員 45 名			

2-5 照会事項5 FD研修会の実施状況

部局名	実施回数	名称	開催日	概要	参加人数 (概数)	備考	AP	SG U
		OSCE ステーション責任者会議	8月6日	OSCE ステーション毎の説明会実施の説明及び OSCE の事前打ち合わせ	OSCE 担当教員 10 名			
		臨床系チューター説明会	10月7日	チュートリアル教育を行うための研修会	チューター教員 34 名			
		医学類 FD 研修会 (全 8 回)	5月～2月	国際基幹教育院から講師を招く等、アクティブ・ラーニングの手法を中心に教育方法を学ぶための研修会	教育委員他、延べ 115 名		○	○
薬学類 創薬科学類 創薬科学専攻 薬学専攻	2	平成 31 (令和元) 年度薬学系新任教員 教務関連研修会	4月16日	・学類及び大学院教務全般の説明 (カリキュラムについて、履修について、成績判定について、アカンサスポータルの運用について、授業アンケートについて、アドバイザー制度について) ・アカンサスポータルについて ・FD について	3 名	ICT 教育推進室の協力を得た。	○	○
		令和元年度 薬学系 (学類・大学院研究教育) FD 研修会	12月22日	「アドバイス面談における教員の役割・指導法」 ・スモールグループディスカッション ・全体討議	45 名	全教員に参加義務を課している。	○	○
保健学類 保健学専攻 (博士前期・後期課程)	3	保健学系 令和元年度第 1 回 FD 研修会	10月2日	中村正人学長補佐 (ハラスメント防止担当)・総括相談員による「パワ・ハラ防止のためのアンガーマネジメント」に関する講演	宮地学類長、大桑 FD 委員長 ほか 60 名			
		保健学系 令和元年度第 2 回 FD 研修会	12月4日	国際基幹教育院 杉森公一准教授による「アクティブ・ラーニングとその学習評価」に関する講演	宮地学類長、大桑 FD 委員長 ほか 45 名	大学教育再生加速プログラム (AP) 検討委員会との共催	○	○
		保健学系 令和元年度第 3 回 FD 研修会	3月4日	保健学類 KUGS Web セミナーコンテンツの供覧	宮地学類長、大桑 FD 委員長 ほか 79 名			○
人間社会環境研究科	3	人間社会環境研究科講演会	6月5日	文系大学院学生の進路・就職について	27 名	研究科長出席		
		人間社会環境研究科第 1 回 FD 研修会	12月23日	大学院学生のメンタルヘルスについて	18 名	研究科長・専攻長・FD 委員出席		
		人間社会環境研究科第 2 回 FD 研修会	2月26日	授業評価アンケート・修了者アンケート結果の分析について	7 名	研究科長・専攻長・FD 委		

2-5 照会事項5 FD研修会の実施状況

部局名	実施回数	名称	開催日	概要	参加人数 (概数)	備考	AP	SG U
						員出席		
新学術創成 研究科	1	令和元年度融合科学共同専攻FD研修会	3月27日	融合科学共同専攻の博士前期課程及び博士後期課程カリキュラムの確認並びに改善点の議論	専任教員 約10名			
医薬保健学 総合研究科 (修士課程・医学博士課程)	9	医学類FD研修会 (全8回)	5月～2月	国際基幹教育院から講師を招く等、アクティブ・ラーニングの手法を中心に教育方法を学ぶための研修会	延べ68名	医学類教育委員会	○	○
		先進予防医学共同専攻(共同大学院) (博士課程) 3大学合同FD講演会	2月6日	本学講師による講演会を実施。医療・保健分野における英語を用いたアクティブ・ラーニングの取組報告。	31名	システム (Adobe Connect) を用いて千葉大学及び長崎大学へ発信		
先進予防医学研究科 (医学博士課程)	1	先進予防医学共同専攻(共同大学院) (博士課程) 3大学合同FD講演会	2月6日	本学講師による講演会を実施。医療・保健分野における英語を用いたアクティブ・ラーニングの取組報告。	31名	システム (Adobe Connect) を用いて千葉大学及び長崎大学へ発信		
法務研究科	4	第1回意見交換会	7月23日	① 1年次チューターの内容について ② 論文指導について	弁護士5名, 教員9名			
		第1回FD研修会	9月24日	① 期末アンケートフォーマットについて ② 他大学進級テストの利用について ③ 必修科目の見直しについて	教員11名(法務研究科長を含む)			
		第2回意見交換会	1月28日	① 未修者指導について ② 論文指導について	弁護士2名, 教員8名			
		第2回FD研修会	3月25日	① カリキュラム改正の方向性について ② 授業アンケート結果について	教員10名(法務研究科長を含む)			
教職実践 研究科	2	学校教育学類と合同主催のFD研修会	1月9日	教育現場に出向いて行う実践講義型授業の提案	研究科長ほか9名		○	
		学校教育学類と合同主催のFD研修会	2月13日	スウェーデンの学校への学生教育研修派遣について	研究科長ほか9名			○
国際基幹 教育院 GS教育 部門	9	第1回・GS教育系情報交換会	4月25日	新任教員の歓迎およびGS科目におけるアクティブ・ラーニング型授業の実施方法についての意見交換	FD委員他15名		○	○
		第2回・GS教育系情報交換会	5月23日	GS教育系教員間の共同研究の可能性に関する意見交換	FD委員他10名		○	○

2-5 照会事項5 FD研修会の実施状況

部局名	実施回数	名称	開催日	概要	参加人数 (概数)	備考	AP	SG U
		第3回・GS教育系情報交換会	6月27日	GS教科目におけるアクティブ・ラーニング型授業の実施方法についての意見交換	FD委員他7名		○	○
		第4回・GS教育系情報交換会	7月25日	GS教科目におけるアクティブ・ラーニング型授業の実施方法についての意見交換	FD委員他7名		○	○
		第5回・GS教育系情報交換会	9月26日	GS教科目におけるアクティブ・ラーニング型授業の実施方法についての意見交換	FD委員他10名		○	○
		第6回・GS教育系情報交換会	10月24日	GS教科目におけるアクティブ・ラーニング型授業の実施方法についての意見交換	FD委員他10名		○	○
		第7回・GS教育系情報交換会	11月28日	GS教科目におけるアクティブ・ラーニング型授業の実施方法についての意見交換	FD委員他6名		○	○
		第8回・GS教育系情報交換会	12月19日	GS教科目におけるアクティブ・ラーニング型授業の実施方法についての意見交換	FD委員他7名		○	○
		第9回・GS教育系情報交換会	2月27日	GS教科目におけるアクティブ・ラーニング型授業の実施方法についての意見交換	FD委員他4名		○	○
国際基幹 教育院 外国語教育 部門	8	EAP Welcome Day	4月2日	EAP科目の担当教員の授業運営等に関する質問・相談の受け付け、新担当者への校舎案内、新旧教員交流による教員コミュニティの構築	FDリーダー、ほか11名（計12名）		○	○
		第1回外国語教育系FD研究会（EAP Workshop 1「Written Feedback / Supporting Students with Disabilities」）	6月20日	EAP科目のライティング授業の添削フィードバックに関する報告とディスカッション、障がいのある学生への対応に関する報告とディスカッション	FDリーダー、ほか10名（計11名）		○	○
		第2回外国語教育系FD研究会（「ドイツ語母語話者教員から見た金沢大学におけるドイツ語教育」）	7月25日	ドイツ語母語話者教員による、日本人学習者にありがちなミスや特徴的な表現等に関する教育法の報告とディスカッション	系長、部門長、FDリーダー、ほか8名（計11名）		○	○
		外国語教育系FD講演会（「英語で行う専門授業（EMI）における国際英語の学び」）	11月1日	大阪大学大学院の日野信行氏による講演（英語で行う専門科目の授業における国際英語の実践的な学びについて）	FDリーダー、ほか23名（計24名）		○	○
		第3回外国語教育系FD研究会（「TOEIC準備コースの補助教材に	2月5日	TOEIC準備科目の補助教材（ワークシート等）や授業内活動に関するアイディア交換、オンライン教材の情報提供、教員	系長、部門長、ほか9名（計11		○	○

2-5 照会事項5 FD研修会の実施状況

部局名	実施回数	名称	開催日	概要	参加人数 (概数)	備考	AP	SG U
		関する情報交換会」)		交流によるコミュニティの構築	名)			
		第4回外国語教育系FD研究会(「初習言語科目における学生への個別サポートについて」)	2月13日	初習言語科目の受講が困難な学生の抱える問題の共有、授業内外で行われた学生支援の事例の共有、よりよい学生支援に向けた検討	FDリーダー、ほか8名(計9名)		○	○
		第5回外国語教育系FD研究会(EAP Workshop 2「EAP& Technology」)	2月14日(午前)	EAP科目のカリキュラム改訂に関する説明、自動添削・評価システム等の英語教育とテクノロジーに関する報告とディスカッション	FDリーダー、ほか13名(計14名)		○	○
		EAP & Technology 自動添削・評価システムのデモンストレーション	2月14日(午後)	ETS担当者による Criterion 自動添削・評価システムのデモンストレーション	FDリーダー、ほか8名(計9名)		○	○
国際基幹教育院 高等教育開発・支援部門	19	FD ランチョン	5月27日	アクティブ・ラーニング入門	6名		○	
		FD ランチョン	6月5日	グループ学習	2名		○	
		FD ランチョン	6月11日	アクティブ・ラーニングを支える図書館リソース	9名		○	
		FD ランチョン	6月24日	Peer-Assisted Learning を組み込んだ授業づくり	3名		○	
		FD ランチョン	7月2日	ALA が参画する授業の実践	9名		○	
		基幹教育院 FD	7月4日		30名			
		FD ランチョン	7月8日	クリッカーを活用した授業実践	8名		○	
		FD ランチョン	7月17日	課題の作り方	12名		○	
		FD ランチョン	7月25日	学修ポートフォリオ・学修カルテ	10名		○	
		授業設計ワークショップ	9月10日～12日		10名		○	
		部門セミナー	10月30日	メイカー・ムーブメントとアメリカの中等教育	10名			
		全学 FD 研修会	11月20日	外国語教育系における組織的FDの取り組み	41名		○	
		FD ランチョン	11月22日	理工学域における組織的FDの取組みについて 医学類、医学教育研究センターにおける組織的FDの取組みについて	21名		○	
		FD ランチョン	11月25日	反転学習	6名		○	
		部門セミナー	12月11日	金沢大学のベンチマーキング	7名			
		FD セミナー	1月20日	学生を自律的な学習者へと促すには	10名		○	
		FD ワークショップ	1月27日	反転授業ビデオの作成とクラウドサービスの教育利用	4名		○	
		FD ランチョン	1月31日	留学生を対象にした、金沢大学でのライティング教育の実践例	14名		○	

2－5 照会事項5 FD研修会の実施状況

部局名	実施回数	名称	開催日	概要	参加人数 (概数)	備考	AP	SG U
		基幹教育院 FD	2月3日		20名			
総合メディア 基盤セン ター	1	データサイエンス 基礎の教員向け説明会	3月27日	データサイエンス基礎の総合 メディア基盤センター担当回 の授業内容について説明およ び意見交換をした。	9名			
国際機構	3	FD 研修会「CLIL を取り入れた言語 教育 ―理論と実 践―」	10月25日	上智大学教授の池田真氏を講 師に迎え、言語教育のアプロ ーチの一つである CLIL（内容言 語統合型学習）の理論と実践に ついて学んだ。	43名	本研修会 には、国 際機構の 教員に加 え、本学 の英語を 初めとし る外国語 教員、中 高の教諭 も参加し た。	○	○
		令和元年度国際機 構 FD 強化週間	12月9日～ 12月13日	国際機構の常勤・非常勤講師が 相互に授業参観を行い、教育能 力の向上を図った。	30名			
		FD 研修会「民主 的シティズンシッ プ教育と日本語教 育」	2月12日	琉球大学教授の名嶋義直氏を 講師に迎え、ドイツにおける民 主的シティズンシップ教育に ついて学び、それをどのように 日本語教育に生かすか討議し た。	20名			

2-6 照会事項6 その他の活動状況

照会事項5以外にFD活動を実施した場合（他機関主催の講演会及びFD関連の研修を含む）について記載する。

【人間社会学域】

○人文学類

特になし。

○法学類

特になし。

○経済学類

以下のFD活動を実施した。

- ・大学教育再生加速プログラム検討委員会からのパイロット授業選定と支援
- ・教育企画会議専門委員会（FD委員会）参加

○学校教育学類

特になし。

○地域創造学類

特になし。

○国際学類

特になし。

【理工学域・自然科学研究科】

○数物科学類，数物科学専攻

定期的に行っている教員会議において、アクティブ・ラーニング・アドバイザー（ALA）等の制度を周知して積極的な活用を促した。

○物質化学類，物質化学専攻

物質化学類及び専攻では独自に以下のFD活動を行っている。

- ①卒業研究の自己評価を学生及び教員の立場からそれぞれ年1回実施し，卒業研究の充実に配慮。
- ②学生からの意見を直接吸い上げるため，「ひと言ボックス」の設置と運用。

○機械工学類，機械科学専攻

特になし。

○フロンティア工学類

ALA 制度や利用方法を案内し，新規科目での ALA 応募も見られた。

○電子情報通信学類（電子情報学類），電子情報科学専攻

特になし。

○地球社会基盤学類（環境デザイン学類），環境デザイン学専攻

FD 関連の研修は特に行われなかったが，ボトムアップ研究プロジェクトの関連で，教員合宿を実施したので，各教員の研究の視点からシラバスの体系化を図る機会でもあった。

○生命理工学類（自然システム学類），自然システム学専攻

学類会議やメーリングリストを通じた FD 関連情報の配信を行い，授業方法改善の啓発を実行した。

[医薬保健学域]

○医学類

特になし。

○薬学類・創薬科学類，創薬科学専攻，薬学専攻

■薬学教育の充実のため，以下のワークショップ等に教員が参加した。

- ・文部科学省 薬学教育指導者のためのワークショップ(9月) 1名
- ・日本薬学会 第5回若手薬学教育者のためのアドバンストワークショップ(9月) 1名

■共用試験の円滑な実施及び質の向上のため，以下の説明会等に教員が参加した。

- ・2019年度薬学共用試験 OSCE 実施説明会(6月) 1名
- ・2019年度薬学共用試験 CBT 実施及びモニター説明会(6月) 2名
- ・2019年度薬学共用試験 OSCE 模擬医師養成伝達講習会(7月) 1名
- ・2019年度薬学共用試験 OSCE モニター説明会(9月) 1名

○保健学類，保健学専攻（博士前期・後期課程）

以下の FD 活動（看護学の研究と教育の推進のための FD 研修会の開催）を実施した。

- ・NEW PUBMED 勉強会（令和元年12月），講師：伊藤 美和先生（金沢大学情報部情報企画課 雑誌・電子情報係）：旧 PUBMED と新 PUBMED を比較しながら，表示形式や検索方法などの変更点について学習した。参加者 22名
- ・遺伝医療・ゲノム医療の進歩と医療者養成期における臨床遺伝教育の重要性（令和2年

2月), 講師: 渡邊 淳先生 (金沢大学附属病院 遺伝診療部): 遺伝医学教育の現状や課題について, モデル・コア・カリキュラムの内容を中心に学習した。参加者 18 名

・指定規則改正にともなうカリキュラム検討の概要について (令和 2 年 3 月), 表 志津子先生 (金沢大学医薬保健研究域保健学系看護科学領域): 2022 年保助看カリキュラムの変更点と改正内容の重要点について意見交換実施した。参加者 25 名

[人間社会環境研究科]

特になし。

[新学術創成研究科]

特になし。

[医薬保健学総合研究科]

○修士課程・医学博士課程

文部科学省・多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材 (がんプロフェッショナル)」養成プラン (北信がんプロ) において, FD 講演会等を開催し, 事業に関して教職員の理解を深めることができた。また, 補助事業期間を終えた, 文部科学省・課題解決型高度医療人材養成プログラム「北陸認知症プロフェッショナル医養成プラン (認プロ)」においても活動継続の一環として FD 講演会等を開催し, 学内外の教員間で積極的な意見交換等を行った。

[先進予防医学研究科]

○医学博士課程

特になし。

[法務研究科]

筑波大学法科大学院との合同 FD 会議

[教職実践研究科]

令和 2 年 2 月に, 学校実習Ⅱの連携協力校へ出掛け, 学校長と学校実習Ⅱを中心に連携の在り方について意見交換及び評価を行った。それらの結果は, 教務・FD 委員会で取り上げ, 今後の改善に活かした。

[国際基幹教育院]

○GS 教育部門

「スキルアップセンターとの連携を図る」
実施された。アクティブ・ラーニング型授業や英語授業の実施方法に関する発表と討議等, スキルアップセンターとの連携のもとで実施された。

○外国語教育部門

全学 FD 研修会における報告 1 件（大藪加奈・橋本将「GS 言語科目における組織的 FD 活動」と、国際基幹教育院 FD 研修会における報告 3 件（ダガンさかの「英語学習者オートノミーの育成：TOEIC 準備クラスにおける学習計画を取り入れた授業実践」、菅野磨美「EAP と初学者ゼミ II におけるグループ・ディスカッションの実践について」、大藪加奈「Supporting Students with Special Needs」）を行った。

○高等教育開発・支援部門

11 月 5 日 "Challenges in Higher Education: Online/Distance Education, International Students, Contract Cheating"

12 月 22 日「高大接続の課題と可能性」

【総合メディア基盤センター】

特になし。

【国際機構】

従来通り、学期開始前・学期終了後の授業担当者による全体会議を行った。これはその学期の授業の改善を図る FD 活動の取り組みの一環である。

2-7 照会事項7 自己評価及び総評

令和元年度 FD 活動の自己評価及び総評

評価	4: 大いに評価できる,	3: 概ね評価できる,	2: あまり評価できない,	1: ほとんど評価できない
----	--------------	-------------	---------------	---------------

部局名	自己評価	総評
人文学類	3	授業評価アンケートや卒業者アンケート、教員相互の授業参観・授業評価、成績評価基準等の作成・検証、FD 研修会など照会事項のほとんどについては着実に実施しており、全般的に2019年度のFD活動については概ね評価できると思われる。ただし、シラバスの点検については教務委員会との連携がうまくいかず、今年度は一部の科目についての点検にとどまった点は反省点である。また、昨年度からの課題としてあげられていたALA（アクティブ・ラーニング・アドバイザー）の導入と授業評価アンケート結果に対する組織的対応の不足については、今年度から1科目とはいえALAが導入されたこと、および授業評価アンケート結果の公開と学類教員へのフィードバックが可能となった点は前年度と比べて改善された点である。
法学類	3	従来からの取組みを着実に継続しているほか、法務研との連携強化の実施に向けた制度の設計と体制の構築が進展した。
経済学類	4	2回のFD研修会のほかに、以下のFD活動を実施した。 ・経済学類ゼミナール大会 企画・運営 ・教員と学生懇談会 企画・運営 ・大学教育再生加速プログラム検討委員会からのパイロット授業選定と支援 以上、授業や学類のAL活動の活性化と改善に積極的に取り組み「4: 大いに評価できる」と自己評価した。
学校教育学類	4	令和元年度は、当初計画を上回る3回のFD研修会を実施し、1回のFD研究授業、附属学校園連携GPによる学校インターンシップ開発、なるためノート改善の基礎資料となる使用実態や改善に関する調査を当初計画通り実施した。また、新カリキュラム移行に伴うカリキュラムマップの改訂及び、FD・カリキュラム委員会が作成したシラバス点検マニュアルに基づき、学校教育学類に設けられた11専修の教員同士でのピアレビューによる点検も行った。このように当初計画を上回る活動を行うことができたことから、「4: 大いに評価できる」と自己評価した。
地域創造学類	3	学類懇談会を開催し、地域創造学類の教育目標とカリキュラムについて学類教員が継続的に意見交換を重ね、学類教育の在り方について深く検討を行った。この懇談会を通して、学類改組の必要性と可能性について方向を確認した。授業方法の改善等についての狭い意味でのFD研修会は実施できなかったが、学類の教育目標を再確認する機会を得たことで、教員各位が学類カリキュラムと教育内容、教育方法について考える機会を提供できた。
国際学類	3	「外国語で学ぶ」ことへの意識改革や「予習・復習への取り組み」の低調さなどを課題として認識しながら、十分に検討できていない点は多々あるものの、語学以外の科目への関心の喚起、

2-7 照会事項7 自己評価及び総評

部局名	自己評価	総評
		クォーター制導入の実質化の加速など当面の検討事項については、FD 研修会の実施等を通じこれを着実に深化発展させている。また今一つの課題である授業の外国語化（英語化）についても、着実にその数値目標を達成しており、本学類の FD 活動はこれを「概ね評価できる」ものであると判断する。
数物科学類 数物科学専攻	3	数理・データサイエンスに対する社会的ニーズの高まりに対応できるよう、人材育成のための教育拡充を目指した講演会を実施し、産業界・政府機関との意見交換を行った。また、継続的に ALA の申請が行われ、制度の活用がなされている。
物質化学類 物質化学専攻	3	物質化学類では継続的にコース独自の FD 研修会を行っているが、教員による自身の授業への取組を紹介してもらい、その優れた点と問題点をコース全体で討論する取組をはじめ、教育方法改善に向けて十分な努力を行った。また、本実施により、教員個々の FD の意識向上に繋がっている。加えて、理工学域や全学において実施される FD 活動への参加、月例会議における授業評価法や改善策に関する話し合いを継続することで、FD 活動への意識の共有化や改善に取り組んできた。アクティブ・ラーニングの導入や、授業の英語化に関する FD 活動を進めることで、より一層の授業改善を目指す。
機械工学類 機械科学専攻	3	改組に伴い一クラスあたりの受講者数が増加する場合があります、効率的な講義運営が求められる。今年度実施された 3 学類合同 FD 研修会を通じ、上記に関する情報や技術の共有化が進んだ。一部の講義において授業アンケートの回答率が低いケースが見られたため、回答率向上のための検討が引き続き必要である。ルーブリックの整備も進んでおり、適正な成績評価が行える環境の構築を引き続き進めていく。
フロンティア工学類	4	新学類の年次進行や社会情勢に合わせた活動ができた。昨年度に比べて、全般に、シラバスの記載が充実している。
電子情報通信学類 (電子情報学類) 電子情報科学専攻	3	ルーブリックの作成、シラバスへの掲載・確認についてはある程度達成できたが、授業評価・参観については検討できなかった。また、3 学類合同で FD シンポジウムを開催し、ある程度の好評を得た。
地球社会基盤学類 (環境デザイン学類) 環境デザイン学専攻	3	令和元年度に、シラバスの点検による改善、FD 研修によるアクティブ・ラーニングの技法の学習、アクティブ・ラーニング型の授業の取込み、卒業者・修了者アンケート調査の実施により、FD 活動全体として充実した内容となっており、自己評価として概ね評価できる。
生命理工学類 (自然システム学類) 自然システム学専攻	3	ALA 採用科目の拡充及び AL 授業の実質化は継続されており、学類会議やメーリングリストを通じて情報交換することで各コースで組織的な FD 活動を継続しながら、教育方法の改善及び工夫を学類教員全員で共有できるよう努力している。さらに、学生の状況に対応したアドバイス教員の配置及びアドバイス教員との面談を、記録しながら確実に実施しており、特に学生の学業のみならず精神面でのケアを継続して実施している。
医学類	4	・国際基幹教育院との共催でアクティブ・ラーニングを主とした FD 講習会を宝町キャンパスで定期的実施することができた。また 12 月以降開催の 3 回については、学内だけではなく

2-7 照会事項7 自己評価及び総評

部局名	自己評価	総評
		学外の医療系大学にも門戸を広げ、アクティブ・ラーニングの手法を学ぶ機会に加えて、学内外の教員間で積極的な意見交換等を実施するなど、手法や効果について理解を深めた。 ・チュートリアル教育のチューター研修会を毎年開催することにより、教員のチュートリアル教育に対する理解が深まっている。 ・OSCE ステーション責任者会議は、責任者に対する説明・打合せを行った後、各責任者がそれぞれのステーションの担当教員へ説明を行う方式を取っており、多人数の担当教員への説明が効果的に行われている。 ・カリキュラム評価委員会を3回開催し、科目別評価及び教員への評価のフィードバック、また評価に対する意見聴取等を行い、カリキュラムの構築・改善（PDCA サイクル）の体制を確立することが出来た。
薬学類・創薬科学類 創薬科学専攻 薬学専攻	3	金沢大学の方針に従ったFD活動を今年度も実施した。薬学系では毎年、全教員を対象とする薬学系FD研修会を開催するとともに、新任教員を対象とした研修会を独自に開催することで、教育研究の質の向上と教務内容全般の確認作業等を行っている。本年度も12月にFD研修会を開催し、公務欠席者を除けば100%の出席率であった。本年度のFD研修会においては、「アドバイス面談における教員の役割・指導法」をテーマに、教員間で討論を行った。 平成25年度から実施している学生からのアンケートに対する教員側からのフィードバックを継続しており、アンケートに書かれた内容とそれに対する教員側の回答とを、FD委員会で検討の上、薬学類・創薬科学類Webサイトに掲載した。今後も、こうしたシステムの運用や情報のフィードバックにより、教育方法のさらなる改善を行うこととしている。
保健学類 保健学専攻 (博士前期・後期課程)	3	FD研修会(3回)を通じて、コンプライアンス遵守、教育力の研鑽への意欲を高めることができた。高大接続WGを中心に取り組んだ高大接続プログラム・講義により、5専攻横断型の保健学の強みが増し、教育力また研究力の向上につながると考える。学生のアンケートの回収率、特に授業評価アンケートの回収率は低く、「これを基にした」取り組みは少ないものの、各教員においては、ミニッツ・ペーパーやリフレクションシートを利用して、授業に反映させている。授業評価アンケートの利用方法を改めて検討する必要がある。
人間社会環境研究科	3	修了者アンケート、授業評価アンケート及び懇談会を行い、問題点を明確化し、これに対応する施策・FD研修会を行った。
新学術創成研究科	3	当初予定していた融合科学共同専攻のFD研修会について北陸先端科学技術大学院大学と共同で開催し、教育課程改善のための意見交換ができた。また、最初の修了者を輩出し、修了者アンケートを実施できた。
医薬保健学総合研究科 (修士課程・医学博士課程)	3	医学類との共催により、アクティブ・ラーニングを主としたFD講習会を宝町キャンパスで定期的に行うことができた。また、先進予防医学研究科の3大学合同FD講演会においても、国際基幹教育院の教員により、修士課程で実践している医療・

2-7 照会事項 7 自己評価及び総評

部局名	自己評価	総評
		保健分野における英語を用いたアクティブ・ラーニングの取組みについて、千葉大学及び長崎大学の教職員と積極的な意見交換を行い、理解を深めることができた。
先進予防医学研究科 (医学博士課程)	3	昨年度に引き続き共用 VOD 教材の英語化を進めた。また、先進予防医学研究科の3大学合同 FD 講演会においても、国際基幹教育院の教員により、修士課程で実践している医療・保健分野における英語を用いたアクティブ・ラーニングの取組みについて、千葉大学及び長崎大学の教職員と積極的な意見交換を行い、理解を深めることができた。
法務研究科	4	組織的・継続的に、可能な限りの取り組みがなされている。
教職実践研究科	4	令和元年 11 月 27 日に認証評価を受審し「適合」の評価を得た。それまでの過程において、教職実践研究科の全教員で種々の観点から自己評価活動を行ったことは、大いに評価できる。
国際基幹教育院 GS 教育部門	3	今年度予定した FD 活動は概ね実施した。特に、アクティブ・ラーニング及び英語による授業の推進については、GS 科目の教材の英語化を継続的に進めるとともに、主要研究課題【国基 G1】「GS 科目の効果的授業デザイン設計に関する研究」においても前年からの検討を引き継いで実施、検討した。次年度に向けて、教員相互の授業参観の促進方法を工夫するという課題も明確にした。
国際基幹教育院 外国語教育部門	4	外国語教育部門のすべての教育企画部（EAP 教育企画部・国際試験教育企画部・初習言語教育企画部）において、活発な FD 活動を行った。今年度は、部門共通のテーマとして、障がいのある学生や様々な理由で言語科目の受講に困難を抱える学生の支援を取り上げ、研究会を複数開催して、学生の多様化に資する支援事例の共有、支援体制・支援方法の検討を行った。共通テーマに関する研究成果は、国際基幹教育院 FD 研修会でも報告し、EAP 科目では障がいのある学生に関する事項のシラバス記載につなげた。部門では、例年どおり、授業参観や教授法の開発、成績評価方法・基準の検証に取り組むとともに、EAP 科目では新学年暦に対応したシラバス改訂も行った。また、学内の他部局・学類との連携としては、国際試験教育企画部が TOEIC のスコアを基に分析した学生の EMI（英語による授業）受講能力や効果的な EMI 授業形態について、16 学類との個別意見交換会で報告・説明した。今年度はさらに活動の視野を広げ、他大学の教員や研究者との連携・交流・事例共有にも力を入れた。学内の FD 研修会のほか、学外・海外にも外国語教育部門の FD 研究成果や FD 実践状況を発信すべく努め、大学英語教育学会、言語教育エキスポ、英国 EAP 教員学会での報告が採択されている。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で学会発表は中止となったが、今後も外国語教育系・部門の FD 活動を多くの教員・研究者と共有する機会を増やしたい。
国際基幹教育院 高等教育開発・支援部門	4	FD の実施実績については問題がないが、その効果検証が必要である。
総合メディア基盤 センター	3	本センターが組織的に取り組んでいるデータサイエンス基礎について全員で研修ができたので概ね評価できるとした。

2－7 照会事項 7 自己評価及び総評

部局名	自己 評価	総評
国際機構	3	従来からの FD 活動を着実に継続し、シラバス、成績評価基準、 教育内容等において改善を図った。

3 各部局等の BSD 活動



3-1 照会事項1 BSD 研修会の実施状況

部局	実施回数	名称	開催日	内容	参加人数 (概数)	備考
学生部 (学務課)	6	令和元年度東海・北陸・近畿地区学生指導研究会北陸地区部課長研究会	11月15日	学生指導（学生支援を含む）業務の充実発展を図るために、当面する諸問題について協議検討し、併せて学生指導に関する研究を行う。	1名	研修会全体28名
		令和元年度東海・北陸地区学生指導研修会	9月26日～27日	学生指導業務を適正かつ円滑に処理するために必要な基本的知識等を習得することにより、学生指導職員としての資質の向上を図る。	5名	研修会全体60名
		令和元年度東海・北陸・近畿地区学生指導研究会北陸地区研修会	11月25日	学生指導業務を適正かつ円滑に処理するために必要な基本的知識等を習得することにより、学生指導職員としての資質の向上を図る。	3名	研修会全体17名
(新学術創成研究科)		融合科学共同専攻FD研修会	3月27日	融合科学共同専攻博士前期課程及び博士後期課程のカリキュラムの確認並びに改善について議論を行うことを目的とした、北陸先端科学技術大学院大学との合同FD研修会に、両大学の事務職員が主体的に参加することを促し、教務事務に関する理解を深め、教員のFD活動を支援するための研修を行った。	2名	北陸先端科学技術大学院大学から事務職員2名が参加
(学生支援課)		自殺防止のための研修会	12月24日	若者の自殺の予防と対策について、自殺の危険を抱えた人に気づき適切にかかわることができるようになることを目的とした講演を実施	70名	講師:筑波大学医学医療系 太刀川教授
(基幹教育支援課)		学生相談担当者研修会	3月25日	なんでも相談室の基本方針、ハラスメント相談への対応、相談を受ける時の基本的な態度、新型コロナウイルス感染拡大防止にともなう相談対応、共通教育のカリキュラムや履修登録の方法等の説明を行った。	28名	
人間社会系 事務部 学生課	2	大学院学生と研究科長との懇談会	5月22日	学生の意見を活かし、学生支援の充実を図る。	25名	参加者内訳（学生17名、教員6名、職員2名）
		講演「文系大学院学生の進路・就職について」	6月5日	文系大学院学生の進路、就職先の動向、就職活動の課題、課題解決のための方針等について	29名	参加者内訳（学生24名、教員3名、職員2名）
理工系事務部 学生課	0	北陸信越工学教育協会産学連携教育フォーラム（理工学域・自然科学研究科 第12回FDシンポジウム）	3月18日予定	教職員を対象とし、理工学教育に求められるグローバル化と英語化対応について、学界及び産業界からの意見を伺い、現在及びこれからの大学・高専理工系におけるグローバル人材養成と英語による専門教育の在り方について議論する。	—	新型コロナウイルス感染拡大防止の方針により中止

3-1 照会事項1 BSD 研修会の実施状況

部局	実施回数	名称	開催日	内容	参加人数 (概数)	備考
医薬保健系 事務部 保健学支援 課	3	保健学系 令和 元年度第1回F D研修会	10月2日	中村正人学長補佐（ハラスメント 防止担当）・総括相談員による「パ ワ・ハラ防止のためのアンガーマ ネージメント」に関する講演	4名	
		保健学系 令和 元年度第2回F D研修会	12月4日	国際基幹教育院 杉森公一准教授 による「アクティブラーニングと その学習評価」に関する講演	2名	大学教育再 生加速プロ グラム（AP） 検討委員会 との共催
		保健学系 令和 元年度第3回F D研修会	3月4日	保健学類 KUGS Web セミナーコ ンテンツの供覧	5名	
国際部 留学企画課	10	国立大学法人留 学生センター等 留学生指導担当 研究協議会	7月11日	留学生受け入れ政策をめぐる現状 と今後の課題等について説明	3名	東京大学主 催
		ERASMUS 研修	5月11日～ 19日	世界の大学の国際業務担当者との 国際・留学生業務に関する情報交 換	1名	ミーニョ大 学（ポルトガ ル）主催
		大学国際交流・管 理者向け危機管 理セミナー	6月10日	大学国際交流・管理者向け危機管 理の概要について説明	1名	日本アイラ ック主催
		留学生事業に関 する業務説明会 参加	8月5日	留学生事業に関する業務全般につ いて説明	3名	文部科学省 主催
		在留資格説明会	11月15日	在留資格に関する手続き等の変更 について説明	1名	名古屋入国 管理事務所 主催
		トビタテ!留学 JAPAN 日本代表 プログラム説明 会	7月8日 11月29日	トビタテ! 留学 JAPAN 日本代表 プログラムについて説明	2名	文部科学省 主催
		第67回 JCSOS 定例セミナー	12月11日	世界と日本の大学の潮流、学生の 留学中の事件・事故防止策等につ いて説明	1名	海外留学生 安全対策協 議会 (JCSOS)・国 際教育交流 協議会 (JAFSA)共 催
		留学生事業に関 する業務等説明 会	1月22日	留学生政策をめぐる現状と取組等 について説明	2名	文部科学省 主催
		令和元年度第2 回国立大学法人 留学生指導研究 協議会	2月7日	留学生がもたらす大学の国際化を テーマに協議	2名	大阪大学主 催

3-1 照会事項1 BSD研修会の実施状況

(参考)

	名称	内容	参加人数 (概数)	備考
事務局	令和元年度(平成31年度)国立大学法人金沢大学初任者研修	事務・技術系の初任職員に対して、本学の基本的事項について講義、見学体験等の多様なプログラムを提供し、「金沢大学職員」としての基礎的な能力を身につけさせることにより、今後の大学事務執行の円滑化を図る。	13名	
	平成31年度北陸地区国立大学法人等初任者研修	新たに採用された事務系・技術系職員に対し、国立大学法人等事務に関する基礎的知識を修得させ、事務能率の増進を図ることを目的とする。	13名	
	文章作成力研修(基礎編)	役所の重要な業務である文章の作成について、県民に分かりやすく、かつ、適切な文書を作成するための着眼点、組み立て方や効果的な表現方法を習得する。	8名	石川県
	情報システム統一研修(平成31年度第1/四半期)第1回業務の見直しと調達の計画	—	1名	総務省
	2019年度北陸地区国立大学法人等マネジメント研修	課題を解決する能力が求められる。そのためには、管理職が組織の力を最大限に活用することが必要であることから、それらを実現するための、マネジメント能力の向上を図ることを目的とする。	13名	
	仕事効率化研修	組織における業務の役割を理解し、個人として果たすべき役割やできることを知り、時間生産性を職場全体で向上させる業務改善方法の習得する。	3名	石川県
	コーチングスキル向上研修	部下や後輩の育成にあたり、主体的に行動することができる職員を育成するためのコミュニケーション方法をはじめとしたコーチングのスキルについて習得する。	4名	石川県
	2019年度国立大学法人等部課長級研修	国立大学法人等の部長級、課長級職員を対象に、大学運営の基本的知識の修得と幹部職員としての能力の向上を図る。	2名	国立大学協会
	令和元年度異業種交流研修	様々な分野や立場で勤務する受講者が、グループ討議等を通じ、各々が直面している課題や組織の枠を超えた発想を共有することにより、新たな人的ネットワークや地域資源の活用策を構築することをめざす。	1名	金沢市
	説明力向上研修(スピーチ編)	TPOをわきまえた会話術や聞き手を引き付ける表現方法を身に付け、相手に説明する話し方の基礎を習得する。	1名	石川県
	行政クレーム対応研修	行政クレームへの対処方法を学ぶとともに、円滑な県民対応に資するコミュニケーション能力の向上を図る。	1名	石川県
	ファシリテーションスキル向上研修	会議などの集団活動を円滑に進める方法を学び、個々の力を最大限に引き出しながら、組織として効率よく質の高い成果をあげるために必要なスキルについて学ぶ。	1名	石川県
	第9回国立六大学事務職員研修会	千葉大学、新潟大学、金沢大学、岡山大学、長崎大学及び熊本大学の国立六大学の事務職員が、国立六大学連携コンソーシアムの	5名	

3-1 照会事項1 BSD研修会の実施状況

名称	内容	参加人数 (概数)	備考
	趣旨を踏まえ、その具体的な連携・協力の推進や、大学間の垣根を越えた職員同士のネットワークの構築などを目的とする。		
令和元年度東海・北陸地区国立大学法人等人事担当者（係長級以下）研修	東海・北陸地区の国立大学法人、大学共同利用機関法人、独立行政法人国立高等専門学校機構及び独立行政法人国立青少年教育振興機構の機関の人事担当者（係長級以下）研修に対し、役割認識と職務に必要な知識及び能力を付与することにより、法人職員の資質の向上と職務遂行能力の増進を図ることを目的とする。	6名	
2019年度金沢大学職員ビジネス英語研修 ①英語学習法講座Ⅰ ②英語学習法講座Ⅱ ③オンライン英語学習（e-learning）セミナー	—	①6名 ②8名 ③13名	
令和元年度国立大学法人等施設担当職員研修会（初任クラス）	—	1名	東京大学
令和元年度東海・北陸地区国立大学法人等会計事務職員研修会	東海・北陸地区国立大学法人等の事務職員に対して、国立大学法人会計基準等に関する知識を習得させ、かつ、国立大学法人等職員として必要となる見識を研修することにより、各職員の資質の向上を図ることを目的とする。	8名	名古屋大学
令和元年度北陸地区国立大学法人等中堅職員研修	北陸地区国立大学法人等の中堅職員に対し、役割認識と職務に必要な知識及び能力を付与することにより、職務遂行能力の増進を図ることを目的とする。	14名	国立大学協会東海・北陸支部及び富山大学
令和元年度国立大学法人等施設担当職員研修会（中堅クラス）	国立大学法人等の施設担当職員のうち、中堅職員を対象として、施設設備を巡る現状と課題についてその知識を深めるとともに、人材ネットワークを構築・活用して、将来の大学経営を担う人材育成することを目的として、施設担当者職員研修を実施する。	1名	国立大学法人等施設担当部課長会 一般社団法人国立大学協会
令和元年度東海・北陸地区施設担当職員研修会（幹部候補クラス）	東海・北陸地区における国立大学法人等の施設担当職員のうち、幹部候補職員を対象として、組織（職員）の能力開発に必要な知識の習得などを通じて、管理職として重要な人材育成のノウハウを持った幹部職員を育成することを目的として実施する。	3名	国立大学法人等施設部課長会中部地区ブロック国立大学法人名古屋大学施設管理部
文書作成力向上研修（応用編）	事例演習を通して、文書に説得力を持たせる構成方法を学ぶとともに多彩な表現方法に触れ、自らの文書表現力をさらに高める。	2名	石川県
令和元年度国立大学法人金沢大学民間派遣研修	本学一般職員を民間企業に派遣させることにより、民間企業での業務運営の手法や、コスト削減策、サービス向上等について知識を習得させ、業務の効率化等を職務に活かし、職員の資質、能力の向上を図ることを目的とする。	10名	北陸銀行
令和元年度政策評価に関する統一研修	政策評価等に関する理解・認識を深める。受講者が政策評価等に関する知識を活用	2名	総務省

3-1 照会事項1 BSD研修会の実施状況

名称	内容	参加人数 (概数)	備考
	し、PDCA サイクルを回すことを通じて効果的・効率的な行政を推進することなどに資する講義を実施。		
令和元年度北陸地区国立大学法人等新任係長・専門職員研修	北陸地区国立大学法人等の係長・専門職員としての心構え及び職務遂行に必要な基本的、一般的知識を習得させるとともに、係長・専門職員としての能力及び識見を確立させ、国立大学法人等の管理運営の重要な担い手としての資質向上を図ることを目的とする。	6名	北陸先端科学技術大学院大学
2019年度国立大学法人金沢大学主任研修（民間派遣）	金沢大学の事務職員に対して、従来の思考や慣行にとらわれずに、幅広い視野や柔軟な発想で主体的に大学改革や業務改革等に当たる能力を育成するため、職員を民間企業に派遣して、機動的・能率的な業務の進め方や発想方法等を理解させることを目的とする。	7名	北國銀行
令和元年度北陸地区国立大学法人等リーダーシップ研修	北陸地区の国立大学法人、独立行政法人国立高等専門学校機構及び独立行政法人国立青少年教育振興機構の機関の管理職員に対し、立場と役割を認識し、能力及び識見を確立させ、職員としての資質向上を図ることを目的とする。	9名	国立大学協会東海・北陸地区支部及び北陸地区の国立大学法人等機関
説明力向上研修（実践編）	県民や上司などに対して、正確で分かりやすく説明するために必要なスキルやコツなどを実践的な演習を通して習得する。	3名	石川県
実践交渉力向上研修	窓口などの渉外業務を遂行する上で必要となる実践的な交渉力の向上を図る。	3名	石川県
令和元年度国立大学法人等若手職員勉強会	国立大学等の継続的な発展に貢献する若手職員の力量向上。	2名	国立大学協会
コンプライアンス＋リスクマネジメント研修	全てのリスクには、危険へと発展する因子が含まれているとの共通認識の下で、日常的に潜在するリスクに対して、多面的な視点からコンプライアンスリスクを洗い出し、発生の予防策と発生時の対応策を考える演習を行うことで、職場でのコンプライアンスマネジメント並びにリスクマネジメントに役立つスキルを身に付ける。	1名	福井大学
令和元年度金沢大学 ICT 研修	金沢大学の事務職員及び技術職員が担う業務にICTを活用することで、業務効率化と生産性向上を実現するため、現場においてこれを担うことができる人材を育成する。 ICT研修（基礎→応用→活用）を通じて段階的に、実際の業務に導入するために必要な知識の習得と、思考力の養成を図る。	249	
図解表現力向上研修＜第2回＞	「図解で考え表現する」ことの有効性を学び、「誰からも分かりやすい」「誰もが納得する」資料の作成技術を習得する。	1名	石川県
セルフケア能力向上研修	心の調節力を高め、職務遂行上の適度なストレスと上手に付き合うための知恵を学び、生き生きと活動するためのセルフケアの向上を図る。	2名	石川県

3－1 照会事項1 BSD 研修会の実施状況

	名称	内容	参加人数 (概数)	備考
	令和元年度国立大学法人金沢大学人事評価研修（評価者研修）	人事評価制度を有効に活用することを通じて、本学職員の能力開発、意欲向上に寄与するために、事例研究を通じて評価基準の考え方を再認識するとともに、評価者間における評価基準の平準化を図る。併せて、面談を通じて人材育成につなげるためのコミュニケーション能力の向上を図る。	42名	

[学生部]

○新学術創成研究科

全学 FD 研修会に、主体的に参加させている。

○学生部学生支援課

KUGS サポートネットワーク本部会議及び自殺防止専門委員会を開催し、各部局における現状の共有や情報交換を行った。

附属図書館と連携し、自殺防止の啓発に役立つ図書の配架を行った。

また、保健管理センターと連携し、自殺の懸念及びその他個別に対応が必要な学生の支援を行っている。

○学生部入試課

2020 年 1 月 8 日「令和 2 年度金沢大学入学者選抜試験事務担当者打合せ会」を開催し、入試担当者 52 名が参加した。

[人間社会系事務部学生課]

特になし。

[理工系事務部学生課]

・令和元年 12 月 24 日開催「自殺防止のための研修会」（主催：金沢大学学生自殺防止専門委員会共催：全学 FD 委員会）に理工系事務部学生課から担当職員 1 名が出席し、学生の自殺防止対策について学んだ。

・令和元年 10 月 25 日開催「学生の学修支援に関する情報交換会」（主催：金沢大学障がい学生支援室）に理工系事務部学生課から担当職員 1 名が出席し、障がい学生支援室や他学域の取組みを共有しながら今後の支援の可能性について意見交換を行った。

[医薬保健系事務部学生課]

医学類 FD 研修会を教員とともに受講している。

[医薬保健系事務部薬学・がん研支援課]

当課独自の BSD 活動は実施していないものの、必要に応じて総務部職員課や学生部等の主催する BSD に参加する形をとっているほか、「研修」という形式にまでは至らないものの、各自 OJT で専門家らにその都度アドバイスを求め、その内容を業務の参考とし、部署内での共有に努めている。また、職務系の異なる係から成る課であることを生かし、隣接業務に係る情報共有を密に行っている。

[医薬保健系事務部保健学支援課]

特になし。

[国際機構支援室]

特になし。

3-3 照会事項3 自己評価及び総評並びに来年度の改善取組予定

令和元年度 BSD 活動の自己評価及び総評並びに来年度の改善取組予定

評価 4: 大いに評価できる, 3: 概ね評価できる, 2: あまり評価できない, 1: ほとんど評価できない

部局名	自己評価	総評	来年度の改善取組予定
学生部 学務課	3	外部機関が主催する研修会に参加した。直面する課題や必要な知識等について、各大学の取組や考え方に関する意見交換を通じて本学の対応の参考となった。	
学生部学務課新学 術創成研究科	3	教員とともに、カリキュラムの確認や改善を目的とした FD 研修会に主体的に参画させることにより、教員の FD 活動を支援するための研修を行うことができた。	
学生部 学生支援課	4	指導教員及びアドバイザー教員等による指導や、関係部署、関係教職員の協力により、令和元年度の学生自殺者数は 0 名であった。	自殺防止に関する研修会を継続して開催する。
学生部 入試課	3	外部機関が主催する研修会に参加するとともに、入学者選抜試験の事務担当者向けに打合せ会を開催し、入学者選抜業務全般について理解を深めた。直面の課題や必要な知識等に対応するために独自に研修会の開催が必要か否か引き続き検討する。	
学生部 基幹教育支援課	3	「学生相談担当者研修会」は、「なんでも相談室」で学生からの相談を受ける教員や学生を対象に開催しているが、相談員となるメンバーが毎年変わるため継続した開催が必要と思われる。	次年度も引き続き対象者に向けて実施する予定である。
人間社会系事務部 学生課	3	いずれも、大学院学生向けの企画、講演であったが、大学院学生の支援に関わる職員にとっても貴重な機会であった。講演は学生からも好評であり、継続して開催することとしている。	
理工系事務部 学生課	2	担当職員が他部署主催の研修等に参加した実績はあるが、当課の活動としては不測の事態により評価対象となる実績がなかった。	当課の責に帰さない不測の事態によるものであり、来年度の活動予定において、時期の移動や回数増などの変更は予定していない。
医薬保健系事務部 学生課	2	地区事務部主催で BSD 活動を実施することは、講師、予算、課題の問題もあり、難しいと考える。職員の研修としては、大学全体の研修、他大学合同の学生系研修、外部機関主催の研修に参加している。	大学全体の研修、他大学合同の学生系研修等の研修に参加する。
医薬保健系事務部 保健学支援課	3	今年度は FD 研修会を 3 回行い、パワハラ防止、アクティブラーニング及び KUGS Web セミナーについての研修を行った。これらの研修会を通じ、パワハラを	引き続き定期的に FD 研修会を開催するとともに、学内外で実施される研修へ積極的に参加する。

3-3 照会事項3 自己評価及び総評並びに来年度の改善取組予定

部局名	自己評価	総評	来年度の改善取組予定
		防止するための心構えやアクティブラーニングを用いることによる教育評価の改善等について理解を深めることができた。	
医薬保健系事務部 薬学・がん研支援課	3	「研修」という形式にまでは至らないものの、各自 OJT で専門家らにその都度アドバイスを求め、その内容を業務の参考としており、そうした経験について課内での共有に努めている点、課の特徴を生かして隣接業務に係る情報共有を密に行っている点は評価できる。	
国際部留学企画課	3	留学生支援を図るため、文部科学省主催の「留学生事業に関する業務等説明会」等、外部が主催する担当者説明会や研修会に積極的に参加した。特に本学交流協定校であるポルトガル・ミーニョ大学での研修に職員を初めて派遣し、各国の国際・留学生業務担当職員と情報交換を行った。	

4 資料編

4 - 1

金沢大学 FD 委員会規程

(平成 20 年 4 月 1 日規程第 1031 号)

(設置)

第 1 条 金沢大学教育企画会議に、国立大学法人金沢大学基幹会議規程第 22 条第 1 項の規定に基づき、金沢大学 FD 委員会(以下「委員会」という。)を置く。

(目的)

第 2 条 委員会は、本学及び本学の教員が、教育の質的向上を図るために組織的に取り組む活動を推進する事項について審議することを目的とする。

(審議事項)

第 3 条 委員会は、次に掲げる事項を審議する。

- (1) 教育方法等の調査・検討に関すること。
- (2) 研修会等の実施に関すること。
- (3) 各部局が実施する活動への支援に関すること。
- (4) その他全学的な連絡・調整に関すること。

(組織)

第 4 条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 教育担当理事が指名する学長補佐 1 人
- (2) 各学域を担当する教員から選出された者 各 2 人
- (3) 各研究科を担当する教員から選出された者 各 1 人
- (4) 国際基幹教育院に所属する教員から選出された者 2 人（うち 1 人は高等教育開発・支援系から選出する。）
- (5) 学生部長
- (6) その他委員長が必要と認めた者 若干人

(任期)

第 5 条 前条第 1 号から第 4 号及び第 6 号の委員の任期は 1 年とし、再任を妨げない。

2 前項の委員に欠員が生じた場合の補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第 6 条 委員会に委員長を置き、第 4 条第 1 号の委員をもって充てる。

2 委員長は、委員会の会議を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名した委員がその職務を代行する。

(会議)

第 7 条 会議は、委員の過半数が出席しなければ開くことができない。

2 議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(委員以外の者の出席)

第 8 条 委員長は、必要があると認めたときは、委員以外の者を会議に出席させ、意見を聴くことができる。

(ワーキンググループ等)

第 9 条 委員会に、専門的事項を審議するため、ワーキンググループ等必要な下部組織を置くことができる。

(事務)

第 10 条 委員会の事務は、学生部学務課において処理する。

(雑則)

第 11 条 この規程に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が別に定める。

附 則

この規程は、平成 20 年 4 月 1 日から施行する。

附 則

この規程は、平成 26 年 4 月 1 日から施行する。

附 則

この規程は、平成 26 年 4 月 1 日から施行する。

附 則

この規程は、平成 28 年 4 月 1 日から施行する。

附 則

この規程は、平成 29 年 4 月 1 日から施行する。

4-2

金沢大学におけるFD活動指針

平成21年3月9日 FD委員会承認
 平成21年4月10日 教育企画会議承認
 平成26年9月12日 教育企画会議改正
 平成28年7月26日 FD委員会改正
 平成29年3月10日 教育企画会議改正

本学は、社会の信頼に応える学士課程並びに大学院課程教育を実現するために、社会的要請に的確に対応し、本学が掲げる教育研究上の目的に根ざした人間を育成することができるように、質の高い教育を実施する責務を負っている。

金沢大学学則第3条において、本学は、教育水準の向上を図り、本学の目的及び社会的使命を達成するため、自ら授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を行うことを定めている。もとより、授業の内容及び方法の改善は、各教員や部局等において地道に積み重ねられてきたものであるが、今後は、それらの改善に向けての取組みを、計画・実践・評価・改善のサイクルの中に位置づけ、より組織的かつ継続的に行うことにより、実質的な改善へと繋げていかなければならない。

本指針に基づき、本学のFD及びSD活動がますます活発となり、一層本学の教育の質の向上及び学生支援の推進に繋がることを期待する。

(目的)

第1 この指針は、金沢大学におけるFD及びSD活動についての基本的事項を定め、授業の内容及び方法の改善、教職員による様々な学生支援及びそのための研究・教育に関する研修についての取組みを明らかにすることにより、本学の教職員及び部局等のFD及びSD活動を推進し、もって教育の質の向上を図り、学生支援の円滑な遂行を図ることを目的とする。

(定義)

第2 この指針において、「FD」(ファカルティ・ディベロップメント)とは、授業の内容及び方法の改善等による教育の質の向上並びに学生の心身の保護とキャリア形成を促進する等の学生支援を図るための教員及び部局等の研究、研修等の自発的取組みをいう。

2 この指針において、「SD」(スタッフ・ディベロップメント)とは、教育研究活動等の適切かつ効率的な運営を図るために必要な知識及び技能の習得並びに能力及び資質の向上を図るための教職員の研修等の自発的取組みをいう。

3 この指針において、「BSD(バックアップ・スタッフ・ディベロップメント)」とは、SD活動のうち、教員のFD活動を支援すること、学生の心身の健康を保護すること、及びキャリア形成を促進する等の学生支援を図るための職員の研修等の自発的取組みをいう。

- 4 この指針において、「教職員」とは、本学の常勤及び非常勤の教職員をいう。
- 5 この指針において、「部局等」とは、教職員個人を除き、学域・学類（学部及び学科がある場合はそれを含む。）・研究科・センター等、FD活動に関して、組織的取組みを実施する主体をいう。

（教職員及び部局等の責務）

- 第3 本学の教員は、金沢大学学則第3条（自己点検評価及び研修等）及び金沢大学大学院学則第21条（授業の方法等）に基づき、個人として、積極的にFD活動に取り組むとともに、職務上必要に応じて、SD活動に取り組む。
- 2 本学の職員は、職務上必要に応じて、SD活動に取り組む。
- 3 部局等は、教員のFD活動を促進するために、組織的に授業の内容・方法の改善及び学生支援のための取組みや研修の計画を策定するとともに、その実施内容等を点検し、報告書を毎年度作成する。

（FD委員会の業務）

- 第4 FD委員会は、金沢大学FD委員会規程第3条に基づき、本学におけるFD及びBSD活動並びに本指針に関する事項を審議する。
- 2 FD委員会は、全学におけるFD活動に関する状況等を把握するとともに、それらの情報が全学的に共有されるよう努める。
- 3 FD委員会は、部局等の作成した報告書に基づき、当該年度の全学におけるFD活動に関する報告書（以下、「年度報告書」という。）を作成し、それを教育企画会議に報告する。

（FD委員会委員長による改善の措置等）

- 第5 FD委員会委員長は、部局等のFD活動の改善に必要と認めた場合、FD委員会の議に基づいて、改善のための適切な措置等を講ずるとともに、それを教育企画会議に報告する。

（年度報告書の公開）

- 第6 FD委員会委員長は、年度報告書を公表する。

（部局等の改善に向けての取組み）

- 第7 部局等は、自らFD活動の実施に努めるとともに、その活動内容等について、継続的に改善に努める。
- 2 部局等は、優れたFD活動を行っている教員への表彰や、研修会参加についての証明書発行等の、FD活動推進のための取組みを行うことができる。

（FD活動等への支援）

- 第8 国際基幹教育院高等教育開発・支援部門は、FD及びBSD活動に対して、必要な支援を行う。

4－3

金沢大学履修規程

(平成 20 年 4 月 1 日規程第 1079 号)

(趣旨)

第 1 条 この規程は、金沢大学学則第 49 条第 3 項の規定に基づき、授業科目の履修について必要な事項を定めるものとする。

(授業科目と履修方法)

第 2 条 授業科目は、共通教育科目(「金沢大学<グローバル>スタンダード」を基軸とした、学士課程教育の基盤をなす授業科目をいう。)及び専門教育科目(学域に係る専門の学芸を教授することを目的とする授業科目をいう。)に区分する。

2 履修方法については、国際基幹教育院及び各学域において別に定める。

第 3 条 共通教育科目は、「導入科目」、「G S 科目」、「G S 言語科目」、「基礎科目」、「初習言語科目」及び「自由履修科目」に区分する。

2 専門教育科目は、「学域 G S 科目」、「学域 G S 言語科目」、「専門基礎科目」及び「専門科目」に区分する。

(基幹教育特設プログラム)

第 4 条 特定の分野の学修を目的として、共通教育科目及び各学類が提供する専門教育科目から編成する教育プログラム(以下「基幹教育特設プログラム」という。)を開設し、その学修成果を認定することができるものとする。

2 基幹教育特設プログラムにおいて、所定の単位を修得した者には、共通教育委員会の議を経て、国際基幹教育院長が修了を認定する。

3 前 2 項の教育課程等については、国際基幹教育院において別に定める。

(副専攻)

第 5 条 学生が所属する学域、学類並びにコース及び専攻に係る分野以外の分野又は課題に関する教育課程(以下「副専攻」という。)を開設し、その学修成果を認定することができるものとする。

2 副専攻において、所定の単位を修得した者には、当該学生が所属する学域の教育研究会議の議を経て、学域長が修了を認定する。

3 前 2 項の教育課程等については、各学域において別に定める。

(教育職員免許状の取得に関する授業科目)

第 6 条 教育職員免許状を取得しようとする者は、別に定める「教職に関する科目」、「教科に関する科目」、「教科又は教職に関する科目」及び「特別支援教育に関する科目」の単位を修得しなければならない。

(受講者の抽選・選抜)

第 7 条 一部の授業科目については、選抜試験又は抽選等で受講者を選定することがある。

- 2 前項の授業科目及び受講者の適正人数は、国際基幹教育院及び各学域において指示するものとする。

(履修手続)

第8条 学生は、履修を希望する授業科目について、別に定める履修登録期間に履修登録手続により学域長又は国際基幹教育院長に願い出、許可を受けなければならない。

- 2 学生は、履修登録期間後に履修を希望する授業科目の確認を行い、変更する場合は確認・変更期間内に手続を行わなければならない。
- 3 履修登録手続をしていない授業科目については、履修することができない。履修登録手続に不備又は誤りがあった場合も同様とする。
- 4 やむを得ない理由により、所定の期間内に履修登録手続を行うことができない場合は、その理由を付して学域長又は国際基幹教育院長に届け出なければならない。

(履修登録の制限)

第9条 各学期又は各クォーターに履修登録できる単位数の上限は、各学域及び国際基幹教育院で別に定める。

(履修許可の取消し)

第10条 履修を許可された後においても、本規程に違反して履修登録したことが判明した場合には履修の許可を取り消すことがある。

(単位認定対象資格)

第11条 次に掲げる各号のいずれかに該当する学生は、単位認定を受ける資格がないものとする。

- (1) 当該授業科目の履修登録をしていない者
- (2) 授業出席回数が国際基幹教育院及び各学域で定める出席すべき授業回数に満たない者
- (3) 休学及び停学中の者

(不正行為)

第12条 試験等における不正行為については、金沢大学学生懲戒規程の定めるところによる。

(単位確定時期)

第13条 単位確定の時期は、次の各号に掲げる時期とする。

- (1) 前期開講授業科目は、9月末日とし、後期開講授業科目は、3月末日とする。
- (2) 前号の規定にかかわらず、卒業者については学位授与の日をもって単位確定の時期とする。

(成績の評価)

第14条 授業科目の成績は、次の各号に掲げる基準によるものとする。

評語	英訳(証明書)評語	判定	学修達成度
(1) S	AA	合格	90%以上
(2) A	A	合格	80%以上 90%未満
(3) B	B	合格	70%以上 80%未満
(4) C	C	合格	60%以上 70%未満
(5) 合	P : Pass	合格	60%以上
(6) 認定	CF : Certify	合格	60%以上
(7) 不可		不合格	60%未満
(8) 否		不合格	60%未満
(9) 放棄		不合格	

- 2 「合」及び「否」の評語は、一定水準の成績達成を目的とした授業科目において使用するものとする。
- 3 「認定」の評語は、本学の開講科目以外の授業科目及び外部試験等の結果により、評価する授業科目において使用するものとする。ただし、単位互換協定書その他により定めがある場合は、この限りでない。
- 4 単位認定を保留とする場合の基準及び保留後の成績評価方法については、国際基幹教育院及び各学域において別に定める。
- 5 成績通知には、第1項の評語を用いる。
- 6 成績証明書には、判定が合格となった授業科目のみ記載し、第1項の評語を用いる。ただし、認定は「認」と表示する。

(総合成績評価)

第15条 前条の成績の評価に対して次の各号に掲げるグレード・ポイント(以下「GP」という。)を設定し、不合格の授業科目を含めて、履修科目のグレード・ポイントの平均(グレード・ポイント・アベレージ(以下「GPA」という。))を算出し、総合成績評価を行う。

評語	GP
(1) S	4点
(2) A	3点
(3) B	2点
(4) C	1点
(5) 合	対象外
(6) 認定	対象外
(7) 不可	0点
(8) 否	対象外
(9) 放棄	0点(第14条第2項に規定する評語を用いる科目については対象外)

- 2 単位認定が保留となった授業科目のGPは、0点とする。

3 GPA を算出する基準は、次のとおりとする。

$$\text{GPA} = (\text{授業科目で得た GP} \times \text{その授業科目の単位数}) \text{の総和} / (\text{履修登録した授業科目の単位数の総和})$$

4 成績証明書には、GPA は明記しない。

5 GPA における保留授業科目は、履修登録した授業科目の単位数の総和に含める。

6 再履修の取扱いについては、国際基幹教育院及び各学域において別に定める。

7 GPA 対象外授業科目は、次のとおりとする。

(1) 共通教育科目

「導入科目」、「いしかわシティカレッジの他大学提供科目」、「放送大学の授業科目」、「入学前の既修得単位を認定した授業科目」及び「外部試験によって「認定」の評語で単位認定した授業科目」

(2) 前号以外の共通教育科目については、各学域において別に定める。

(3) 専門教育科目については、各学域において別に定める。

(成績評価の疑義申し立て)

第 16 条 成績の評価に対する疑義申し立てについては、「成績評価への疑義申し出に対する対応についての申し合わせ」による。

附 則

この規程は、平成 20 年 4 月 1 日から施行し、平成 20 年度入学者から適用する。

附 則

この規程は、平成 21 年 4 月 1 日から施行し、平成 21 年度入学者から適用する。

附 則

この規程は、平成 23 年 4 月 1 日から施行する。

附 則

この規程は、平成 26 年 4 月 1 日から施行する。

附 則

1 この規程は、平成 28 年 4 月 1 日から施行し、平成 28 年度入学生から適用する。

2 平成 28 年 3 月 31 日に在学する者については、なお従前の例による。ただし、第 4 条第 2 項に定める共通教育特設プログラムの修了認定は、国際基幹教育院長が行うものとする。

附 則

この規程は、平成 30 年 4 月 1 日から施行する。

4-4 金沢大学シラバス様式

4-4

金沢大学シラバス様式

〇〇学域 〇〇学類

科目名[英文名] / Course Title			
担当教員名[ローマ字表記] / Instructor			
科目ナンバー / Numbering			
時間割番号 / Course Number		科目区分 / Subject distinguished	
講義形態 / Lecture Form		開講学域等 / Faculty	
適正人数 / Number of Proper		開講学期 / Semester	
曜日・時限 / Day・Period		単位数 / Number of Credits	
対象学生 / Target students			
キーワード / KeyWord			
講義室情報 / Lecture room information			
開放科目 / Open account			
備考 / Note			
授業の主題 / Topic			
授業目標 / Objective			
学生の学修目標 / Learning Goal			
学修成果 / Learning Outcomes			
授業概要 / Outline			
授業スケジュール / Lecture Schedule			
評価方法 / Grading Method			
※成績評価: 次項の項目及び割合で総合評価し、次のとおり判定する。 「S(達成度90%~100%)」、「A(同80%~90%未満)」、 「B(同70%~80%未満)」、「C(同60%~70%未満)」を合格とし、 「不可(同60%未満)」を不合格とする。(標準評価方法)			
評価の割合 / Grading Rate			
ルーブリック / Rubric			
ルーブリック備考 / Rubric note			
予習に関する指示 / Preparation			
復習に関する指示 / Homework			
教科書 / Text Books			
参考書 / Reference Books			
教科書・参考書補足 / Teaching Materials Note			
オフィスアワー等(学生からの質問への対応方法等) / Consultation Time			
履修条件 / Prerequisites			
適正人数 / Class Size			
受講者調整方法 / Method for adjusting class size			
その他履修上の注意事項や学習上の助言 / Others			
カリキュラムの中の位置づけ / Position of Curriculum			
特記事項 / Special Note			

4－5 令和元年度金沢大学FD委員会名簿

4－5

令和元年度 FD委員会

事務担当: 学生部学務課教務係

任期2019.4.1～2020.3.31

部 局 等	職 名	氏 名
	学長補佐	森 雅秀 *
人間社会学域	教授	小林 宏明
人間社会学域	教授	寒河江 雅彦
理工学域	教授	秋田 純一
理工学域	教授	水野 元博
医薬保健学域	教授	吉田 栄人
医薬保健学域	教授	大桑 麻由美
人間社会環境研究科	教授	清水 邦彦
法務研究科	准教授	宮本 誠子
自然科学研究科	教授	五十嵐 心一
医薬保健学総合研究科	教授	塚 正彦
先進予防医学研究科	教授	田嶋 敦
新学術創成研究科	准教授	小川 数馬
教職実践研究科	准教授	鈴木 瞬
国際基幹教育院	准教授	河内 幾帆
国際基幹教育院	准教授	杉森 公一
事務局学生部	学生部長	西出 良一

* 委員長



令和元年度
金沢大学FD活動報告書
令和2年8月発行

編集・発行 金沢大学FD委員会
〒920-1192 金沢市角間町
TEL：076-264-5817（学務部学務課）